

田  
中  
社  
長  
の  
恋  
人

その日も田中は佐伯専務と夜遅くまで、来週に迫った仕事の打ち合わせをしている。景気は不況が長引いて、いつまでたっても先が見えずゆとりはない。自転車操業とまでは行かないが手堅い仕事のやり方をしている田中の会社でさえ、最近になってようやく大きな山を越えたばかりだ。

「今日はこれくらいにしておきましょうか。あんまり毎日遅くなる」と佐伯さんの奥さんに叱られる。

佐伯専務はもちろん冗談だとわかっていて苦笑いをする。

「社長こそお疲れでしょう。なんとかめどもついたし、そろそろ引き上げますか」

「そうですね。ああそうだ。今度の仲田産業との打ち合わせ、あれやっぱり私が出ましよう。取り引きは小さくても向こうは老舗だ。私が出ないと失礼に当たる」

「そうですね。私がまじめようと思つていたんですが、社長がおっしゃるのならそうしましよう。仕事抜きでもあちらとは長いつきあいだ。きつと喜びますよ」

「そうだといいんですけどね。じゃ、帰りましようか」

田中は佐伯専務と一緒に地下の駐車場まで降りていって、地味だがグレードの高い国産車と一緒に乗り込む。運転は佐伯がする。運転手を雇う金に困っているわけではないのだが、昔からの習慣でこ

んな時間になったときは佐伯が運転手の役をつとめることになって  
いる。田中も佐伯も、そのことを特に不自然なこととは思っていない。  
い。

車は地上に出てゆつくりと走り出す。

「佐伯さん、息子さんのことなんですけれどね」

「はい」

「そろそろ、出向先から戻ってきてもらってもいいんじゃないかと  
思うんですけど、どうですか」

「そうですね。そうしていただけると、秀一郎も喜びます。早く社  
長の下で腕を振るいたいって、いつも言ってますから」

「秀一郎君も義理堅い人ですね。あれだけの才能があればもっと大  
きな会社で好きなことができるのに。うちみたいな小さい会社で苦  
労することなんかないのに」

「せがれは社長を尊敬しているんですよ。奨学金を出していただき  
て無利子無期限しかも何の条件もなし、そんなことをしていただい  
たのに好き勝手なことをしたら罰が当たります」

「私は佐伯さんが今までしてくれたことの恩返しだと思って当然の  
ことをしたつもりなだけなんです。子どもは親に似るものなんです  
ね」

「そうですね」  
佐伯専務は苦笑いをしている。しかしこの話題はあまり長く続け

ない方がいい。話が田中の家庭のことにふれるといろいろと差しさわりのある。

佐伯は車をゆっくりとしたスピードで走らせている。

「そうだ。佐伯さん、今日はちよっと寄ってみたいところがあります」

「ご自宅にはお帰りにならないんですか」

「帰りますけれどね、たまには町で飲んでみるのもいいかなと思つて。ほら、昔よく行った新町のNE。あそこでちよっと飲んで帰ります。無理には誘いませんよ」

「エヌ・イーですか。なつかしいですね。昔あそこで朝まで飲んだことがよくありましたっけ」

「もうずいぶん昔ですわねえ」

「それじゃあ近くまで行って、社長をおろして私は帰ります」

「すみません。この次は二人で一緒に飲みましょう」

時刻はもう遅い。あたりはかなり酩酊したサラリーマンがめだつ。田中は通りの様子を眺めながらゆっくりと歩いていく。このあたりもずいぶん様子が変わった。

NEは表通りからひとつ入った細い通りに面している。つぶれて

いなければいいが。

店は昔の場所にあった。女を置いていない、酒を飲ませるだけのバーだ。

しかし店の中に入ってみると雰囲気は違っていた。うるさい音楽と酔っぱらった男女の嬌声。最近はどこでもこうなってしまう。田中の大嫌いなカラオケがないだけまだ救われる。

田中はカウンターにすわってボーイに声をかける。

「ボーイさん、カクテルの名前は忘れちゃったんだけど、ウオツカのダブルをオレンジジュースで割って氷はいれなくて、できる？」

「はい、承知しました」

「あ、それから聞きたいんだけど」

「なんででしょうか」

「この店、オーナーかわったの？」

「いいえ。あんまり昔のことは知らないんですが、ずっと同じ人だと思えます」

「そうなの」

水商売はつらいものがあることは知っている。客を選ぼうとしてもいやおうなく世間の方が変わってしまった、それに合わせないと店がもたない。  
「お待たせしました」

「ありがとう」  
田中は出されたカクテルをゆっくりと味わう。グラスはちゃんと冷やしてある。オーナーの妥協しない教育がまだ残っているようだ。カクテルはうまいが、店の中があまりにも騒がしいので、もう一杯だけ飲んで引き上げようかと思っていると、店の片隅にたむろしていた若い男女の中からひとりの女が近寄ってきて田中の隣にすわった。  
「おじさん、ひとり？」  
「見ず知らずの人間に向かって、いきなりおじさん呼ばわりは失礼じゃないのか」  
「あら悪かったわね。初めて見る顔だからおじさんって言うしかないじゃない。それにあたしから見たらどう見たっておじさんよ」  
「そうなんだろうが、とにかくかまわないでくれ。静かに酒を飲みただけなんだ」  
「おいしそじゃない。あたしにも一杯おごつてよ」  
「おごる理由がない」  
「あたしみたいないない美人と一緒に酒を飲んであげるんだからそれでもいいでしょ。ねえ、あたしに同じものちょうだい」  
「田中が無視している、カクテルが女の前に出された。」  
「おいしいね。でも子どもの飲むジュースみたい」

「気をつけな。なめてかかるとあつという間に酔いが回るぞ」  
「その時若い男が田中のそばにやつてきた。」  
「よお、おっさん、なんのつもりで俺の女といちゃついてんだよ」  
「今度はおっさんよばわりか。いちゃついてはいない。この子が勝  
手に俺の隣にすわって勝手に注文した」  
「ぬかしてんじゃねえよ。てめえ俺のスケをひっかけようとしやが  
ったな。落とし前をつけてもらおうか」  
田中はうんざりした。  
「この店じゃ静かに酒も飲ませてくれないのか」  
「落とし前をつけるっていつてんだろ」  
男は田中の襟首をつかもうとした。しかし田中は左手ですばやく  
男の手首をねじ上げた。  
「いてーっ！」  
様子を見ていた男女がにわかに関色ばんで田中を取り囲んだ。田  
中は気迫を持った目つきで彼らを制している。  
「おい、ボーイ、オーナーを呼べ。田中が呼んでいるといたらわ  
かる」  
「離せ、てめえ」  
「静かにしてくれっていつてきたら」  
店の奥から年輩の男性が出てきた。

「田中さん、なにかありましたか」

「なにかじゃないよ。最近じゃおたくの店はこんな連中を出入りさせているのか」

「すみません。また馬鹿どもがやらかしましたか。おい、稲田、この人はな、お前みたいになちんぴらがかなうような相手じゃない。もつと相手を選べ」

「しらねえよ。このおっさんが俺にからんできたんだ」  
「言いやがったな」

田中は右手で男の髪の毛をつかんで頭をカウンターに押しつけた。

「オーナー、俺はあんたの商売のやり方に口を出すつもりはない。しかしここだけは俺がいちばん気に入っていた場所だったんだ。この店がこんなだとこの町で静かにうまい酒を飲める場所がなくなっちゃまう」

「すみません。最近はお客の質が落ちて酔っぱらうためだけに酒を飲むようになつばかりで、そういう連中を追い払うのに都合がよかつたから多少のことは見逃していたんですが」

「そういう言い訳をするのか。店の名前が泣くぞ。NEはノー・エクスキューズ、言い訳しませんという意味じゃなかったのか」  
「申し訳ない。おっしゃるとおりです」

「それとも昔みたいにな、うちが仕切らないとまともな商売ができないって言うのか」

「いえ、かんべんしてください。この連中はもう出入りさせません」

「そこまで言っていないよ。俺にはかまうなって教えてやってくれ。」

「それだけでいいよ」

「わかりました。稲田、今日はとっとと帰れ。この人には手を出さない。しばらくらく店には来るんじゃない」

「わかつたら返事をしろよ」

田中が右手に力を加えると男は悲鳴混じりで返事をした。

「わかつた。わかりました」

「それじゃ俺の前から消えてくれ」

男女があわてて店を飛び出していく。最初に話しかけてきた若い女が入り口のところに立って田中を見ている。仲間が彼女の手を引っ張って消えていく。

「不愉快な思いをさせてすみません。今日は私のおごりにさせてください」

「金は払うよ。オーナーの商売がつらいのは知っているんだから。もう一杯同じものをくれ」

「私が作りましょう」

「それがいいな」

田中がほろ酔い加減で店から出て表の通りに向かって歩いていくと、うしろでクラクションが軽く鳴った。気にせず歩いていくとまた鳴る。

振り返ってみると左ハンドルの派手な赤いスポーツカーにさっきの若い女が乗って、田中に向かって手を振っている。

「おじさん！」

「おい、おじさんは失礼だって言っただろ。それに俺にはかまうなつて言ったはずだ」

「いいじゃない。あんた、気に入ったよ。次郎のおどしにびびらなかつた中年なんて今までいなかつたもん。おじさん、やくざさん？」

「おじさんの次はやくざか。どういうしつけを受けて育つたんだ」

「そんなもんしるか」

「とにかく、俺は君のおじさんじゃないし、やくざでもない。ただの中年のサラリーマンだ」

「わかつたよ。あやまるからさ、もういちどいっしよに飲もうよ」

「また、はめるつもりか」

「そんなんじゃないよ。なんだよ。せっかくひとが誘ってやってい

るのに。若い女に声をかけられたことなんてないんだろ」

「ないね。かけられたいとも思わない」

「なんだよ。へんなやつ」

スポーツカーは急発進して走り去っていった。  
おかしな夜だ。しかし特に不愉快ではなかった。

別の夜。

田中はまた佐伯専務と残業をしている。取り引きが成立して納品も終わり、書類の整理をするだけの簡単な仕事だ。社長と専務が残業しなければならぬような零細企業ではないのに、昔からの習慣でこんな仕事のやり方をしている。社員はこういうやり方をいわば二人の趣味だと思っているようだ。

「これで今回は終わりですね。またなんとか持ちこたえられた」  
「予想以上の成果ですよ、社長。正直なところ今度ばかりはだめかと思っただけですがまだ余力を残して決済できるところまでこぎつけました」

「そうだ。この前の約束があつた」

「何でしたか」

「二人で飲もうって言ったでしょ。NEはまだつぶれてなかつた」  
「それはいいな。じゃ、今回の打ち上げというところでひとついきま

すか」

「そうしましょう」

「すみませんが家に電話を入れておきます」

「相変わらずの愛妻家ですね」

佐伯はてれ笑いをしながら部屋を出ていく。

田中は電話をかける。

「NEですか。田中といいますがオーナーいますか。あ、オーナー。田中だけどこれから佐伯専務と行きたいんだけど開いている？いいよ、貸し切りになんかしてもらっても金払えないから。ただしこのあいだみたいなおかしな事は起こらないようにしてくれよ。じゃよろしく」

タクシーを呼んで田中と佐伯はNEに行く。

店に入って音楽がにぎやかなのに佐伯は少し驚いている。

「だいじょうぶ。酒の味は落ちていないから」

「いらっしやいませ」

「やあオーナー、こんばんは。カウンター空いてる？」

「テーブルでなくていいんですか」

「カウンターのほうがいいの。ウオツカとトニックとライムと氷。あ

とは自分たちでやるから」

田中と佐伯はカウンターのすみに並んで腰掛ける。

「社長と二人だけで飲むのは何年ぶりでしたか」

「最後のトラブルがあったとき以来ですね。原田の件」

「ずいぶん昔ですねえ」

「そうですね。あれから会社もずいぶんと様変わりしたし」  
「私も自分がこんな仕事をするようになるとは思っていませんでした」  
「申し訳ないと思ってます。でも佐伯さんしか頼りになる人がいなかったから。ずいぶん無理をきいてもらいました」  
「みずくさいですよ社長。社長が小さかった頃からのつきあいだ」  
「後ろから聞き覚えのある女の声でした。」  
「こんばんは」  
「振り返ると先日のトラブルのきっかけになった女が立っている。また君か。オーナーに追い出されなかつたのか」  
「次郎たちはあんたが来るって聞いて逃げ出しちゃったの。でもあはしは静かにしていたらいてもいいって言われたから待ってたの」  
「変な子だな」  
「社長、この子は誰ですか」  
「一回しか会ったことがない。この店でだよ。おかしい関係じゃない」  
「へえ、あなた社長さんなの。中年のサラリーマンだなんて嘘ついて」  
「女は田中の隣に勝手に腰掛ける。田中は気にもしない。嘘はついていない。社長ごっこだよ。ときどき社長になったり専

務になつたりして遊んでゐるんだ。そうですね佐伯専務」

佐伯は黙つて笑つたまま田中の冗談につきあつてゐる。

「中年の変態二人組」

「何とでもいえ」

「でもよく見たらかつこいいね。二人とも俳優みたい」

「佐伯専務、我々はこういう子どもからみたら、かつこいいんだそ

うです」

「我々みたい修羅場を何度もくぐつてきたら、外見なんか関係な

いって事がわからないんでしよう」

「男を見かけで判断するのは子どもの証拠だ」

「何よ。子どもももつて馬鹿にして。あたしこれでもとつくに二

十すぎてるんだよ」

「それがどうした。佐伯専務には立派に成人したお子さんがいるん

だ」

「社長、子どもの話は、なしにしましょう」

「ああ、すみません。とにかく最近の若い人はこんなものらしいで

すよ。特にこの子は自分でもしつけができていないっていつてる」

「お嬢さん、この店はもともと私たちみたいな大人の男が酒を飲む

ためにくる場所なんだ。若い人が遊ぶ場所はほかにくらでもある

でしよう」

佐伯が穏やかにさとすようにいう。  
「またこのあいだみたいに追いつく？」  
「我々のじゃまをしななければいい。今日は仕事が終わるまで、飲んでい  
た祝杯なんだ。中年のおじさんのおごりでもいいんだったら、飲んでい  
いよ」  
「うん」  
「名前を知らなかったな。この人は佐伯さん。俺の名前は知ってい  
るだろ」  
「あたしはなお子。ひらがなのなお子」  
「上の名前は？」  
「ないの」  
「おかしなこだな」  
田中はその晩、妙に高揚した気分になっていた。佐伯は、田中が  
若い女に対して今までに見たことのないくらいに多弁になったのに  
少し驚いていた。  
「説教をするつもりはないがね」  
「またお説教かよ」  
「頼みがある。お願いと言ってもいい」  
「なんなのよ」  
「ここは大人の店なんだ。これから先この店に来たいのなら、そん

な子供じみた訳の分からない化粧はやめてくれ」

「何いってんのよ。こんなのふつうだよ」

「最近の流行はしらんが、とにかくそういうのは俺の趣味じゃない。いや違った。この店には合わない」

「あたしの勝手だよ」

「とにかく大人とつきあうならそれなりのかっこうをするものだ」

「誰がつきあうって言ったよ」

「ああ、言っただけでなかつたな。じゃあ勝手にしろ」

それから先のことを、田中は覚えていなかった。

「おはようございます」

「ああ、おはよう」

田中は何年ぶりの二日酔いでかすかな頭痛を感じながら翌朝出勤した。

「社長、おはようございます」

佐伯はにやにや笑いながら田中に声をかけた。

「佐伯さん、昨日は一体なにがあったんだろう」

「覚えていらっしやらないんですか。社長があとまで酔われたのを見たのは初めてですよ。タクシーを呼んで私がご自宅までお送りしたんです」

「全然覚えていない。こんな事は初めてだ。そうだ。あの子はどうしたかな。おかしいな。名前が出てこない」

「あの子も相当酔っていたんでタクシーを呼んでチケットを渡して帰しましたよ。もしも気が利いた子なら、来月とんでもない交通費の請求書が来ますよ」

「まずいな。その請求書、私の個人口座から落としてください」

「何を気にしているんですか。ひとつだけよろしいですか」

「はい」

「社長の私生活に口を出すつもりはありませんが、ああいう種類の若い子とつきあうのはやめた方がいいです。そういうことにかけてはどんなに若くても女の方がいつも上手だ。いのように遊ばれて振り回されるのがおちです」

「遊ばれるも何も、とにかく覚えていないんだ。どんな子だったかも思い出せない」

「それならかえって好都合です。しばらくNEには行かない方がいいですね」

「そうします。でもなんだか残念だな」

田中は午前中書類を見ながら、何とか昨日の晩のことを思い出さうとしたが、佐伯と一緒にカウンターにすわったところからすっぽり記憶が抜け落ちていた。

何があったんだらうと気にしながら時計を見ると正午近くだった。その時電話が鳴った。

「はい、田中です」

「あの、社長。よくわからない電話が入っているんですが」

「私あてですか。誰からですか」

「それが、なお子といえればわかる、としか言わないんです」

田中はようやく昨日一緒に飲んだ女の顔を思い出した。

「わかりました。つないでください」

「もしもし」

「ああ、君か」

「なにが、ああ、よ。あんたひどい嘘つきだね」

「いきなり嘘つきはないだろ」

「嘘つきだよ。あんた、本物の社長じゃないの。この電話かけるんだって恥かいたわよ」

「そういえば、どうしてこの電話番号がわかった」

「NEのオーナーに聞いたの。あんたがどこの誰かって。瀬戸総業

の田中だっというから、番号案内で調べてかけたのよ」

「それでどうして恥をかく」

「田中さんお願ひしますって言ったたら、社長のことですかって聞か

れたから、社長じゃない方の田中さんですっていったのよ」

「それだっというから、番号案内で調べてかけたのよ」

「それでどうして恥をかく」

「田中さんお願ひしますって言ったたら、社長のことですかって聞か

れたから、社長じゃない方の田中さんですっていったのよ」

「それでどうして恥をかく」

田中は少しおもしろくなってきた。

「そうしたらどうした」

「うちには田中は一人しかいません、社長が田中です、だって。あたしあわてて電話切ったわよ」

「それで」

「間違いかもしれないと思ったけど、とにかくもう一度電話したの。社長でも誰でも、とにかく田中さんを出してくれって」

「それでようやくつながったという訳か。悪いことをしたな」

「社長なら社長って、はじめから正直に言えばいいでしょ。どうして嘘をつくのよ」

「酒を飲む場所で肩書きを振り回すのは嫌いなんだ。それに下手に商売をばらすとおかしな連中が寄ってくる」

「あたしのことだって言いたいのに」

「そんなことは言っていない。それよりなんで電話をかけてきた。何も用事はないはずだ」

「とぼけるの。約束したでしょ」

「すまない。正直に言うとは昨日のことは全然覚えていないんだ。君の名前だつてこの電話がかかってくるまで思い出せなかった」

「酒の上のことだからなかったことにしろなんて言わせないわよ」  
「そんなことは言わない。どんな約束だった」

「NEにくるならもっとまともなかつこうをしろって。金がないなら俺が出すって、そう言ったじゃないの。あたしお金ないからね。だからこうやって電話かけているんじゃないの」

田中は笑い出した。

「なにがおかしいのよ！」

「いや、すまない。自分のことを笑ったんだ。まるっきり酒に酔った中年男の言うことだからね」

「そのとおりでしょ。どうするのよ。約束守ってくれるの」

「守るさ。いったん口に出したことは必ず守るよ」

「じゃあ、今から行くからね」

「おい、待ってくれ。まだ仕事がある」

電話は一方的に切れた。

田中は佐伯の内線にかけた。

「佐伯さん、今日の午後は特に用件はありませんよね」

「何もありません。どうかしましたか」

田中はため息をついた。

「始まっちゃいましたよ。昨日の女の子から電話がかかってきた」

「ほどほどにしてくださいよ。今までこういうことがなかった方が

不思議なんですから」

「わかりました。今日は会社には戻れないと思います」

「お気をつけて」

エレベーターを降りてロビーを見渡したが、昨日の女はいなかった。

玄関を出て大通りを見ると、見覚えのある赤いスポーツカーがとまっていて、そのドアに女が寄り掛かっている。

田中が歩み寄っていくと女はふてくされてそっぽをむいた。

「どうした。なんでそんなにむくれている。なんでロビーで待っていないんだ」

「何いつてるのよ。こんなかつこうしてあんなビルの中に入って受付で男を待っているなんてまるつきり馬鹿みたいじゃないの」

「何を気にしているのかわからないな」

女はふくれっつらのまま運転席に乗り込み勢いよくドアを閉めた。

「なにしてるのよ。さっさと乗りなよ」

「わかった。左ハンドルか。まいったな」

田中が助手席に乗り込んで安全ベルトを締めようとしたとたんに、車は急発進した。

「これだから外車はいやなんだ。右側の座席に座っているのに前にはハンドルがない。おまけにツーシーターのスポーツカーだ。棺桶

に乗っているのも同然だ」

「なにをぶつぶつ言ってるのよ。気が小さいんだね」

「ああそうだよ。だから今まで生き延びてこられたんだ。どうして国産車に乗らない。この頃は同じくらいの値段でいい性能の安全な車がちゃんとあるのに」

「あたしの勝手だろ。今日はあたしの言うことを全部聞いてもらうからね。昨日あれだけお説教聞かされたんだから」

「わかったよ。それよりどこに行くんだ。正直言っただ女の服の事なんて何も知らない」

「もう決めてある。前から行ってみたい店があったんだ」

「そうしてくれ。それにしてももう少しスピード落とせないかな」

「いちいちうるさいな」

「ねえ、どっちがいいと思う？」

「な。お子はもう二時間近くも、その高級なブティックで服をあさり続けています。昼食を食べる時間も惜しんでその店に飛び込んだのだ。おかげで田中は何十年ぶりかでファーストフードというものを食べるはめになった。」

「わからないよ。でもどちらとも今着ているものよりはずっとましだ」

「ほんとうにセンスないんだね」

「センスはあるよ。この服装は二十年間変えたことがない」

「さいてー」

どうすればこういう買い物にこんなに時間をかけることができるのか。田中には女のそんな精神構造がいまだにわからない。

「どちらかに決められないんなら、両方買えよ」

「なにいつてんのよ。一着五万だよ」

「それなら二着で十万か。かまわないよ。今月のこづかいがなくなるだけだ」

「景気いいんだね。それなら、あと靴とバッグ」

「いいよ。来月のこづかいも我慢すればいいだけの話だ」

「おじさん、下心あるだろ」

「そんなものがあるか。店員さん、この二着お願いします。それと靴とバッグがあつたら合わせてそろえてください」

「かしこまりました」

靴とバッグを選ぶのにまた二時間かかった。

「請求書は会社の方にお返ししておきましたようか」

店員は田中の素性を知っていて気を利かせたつもりだろうがそれでは困る。

「いや、これはプライベートだからカードで払います」

「承知いたしました」

なお子は田中の差し出したカードを見て驚いている。

「お品物はお包みしてお車までお運びいたします」

「ねえ、こっちのほう、今着ていい？」

「好きにしなよ。君の服なんだから」

荷物を彼女の車の中に置いたまま、田中は二人で少し早い夕食をとることにした。

顔馴染みのレストランが近くにあったはずだが。

「おじさん、すごいんだね。あんなカードもっている人見たことないよ。プラチナカードだっけ」

「商売柄、ああいうものを持っていないとさまにならないんだ。それと、もういいかげん、そのおじさんていうの、やめてくれないか」

「なんて呼べばいいのさ」

「田中だ」

「田中さんだなんて気持ち悪いよ」

「そう呼べよ。まさか、社長さんじゃ、君がどこかのホステスみた

いだ」  
「わかった。ねえ、なんで今のブティックの人、おじさん、じゃなかった、田中さんのこと知ってたの」

「親の代からのつきあいだ。ブティックとかというのになる前から、あの店は有名な洋装品店だった」

「じゃあ今着ているスーツはこのブランド？」

「ブランド？」

なお子は勝手に田中の上着の襟をめくってタグを調べている。

「何て書いてあんの。こんなの見たことないよ。コナカか青山のつるしでしょ」

「そんなことはない。親の代からつきあっている店で注文してあつらえている。だからブランドなんかあるはずがない」

「それで二十年間おなじかっこうなのか。きっとこのへんじゃ有名な人なんだね」

「ある意味ではそうかもしれない」

「そんな言い方じゃわかんないよ」

わからなくてかまわない。わからない方がいい。田中の本当の素性を知って、なお子はいまよりもはるかに驚くことになる。

「おいしかった。こんなにおいしいの初めて」

「そうかな。私はおいしかおいしくはないか、くらいしかわからな  
いから、食べるものにやたらと金をかけるのにいまだになれていな  
い」

店の雰囲気と、相手をしてゐる女との年齢差がそうさせたのか、  
いつのまにか『俺』が『私』になつてしまつてゐるのに、田中は自  
分で気がついてゐない。  
「もつたいたないな。このお店、町で最高のお店だよ。こんなところ  
にも顔が利くんだね。すごいよ」  
「私は別に好きできてゐるわけじゃない。しかし社長と名の付くも  
のが、まさかほか弁とかを食べるわけにはいかないだろう」  
「へんなひと。あたしの知つてゐる中年なんて部長だとか課長だとか  
くらいでいばつてゐるよ。田中さん、社長なのに全然いばつたりし  
ないんだね」  
「なりゆきで社長をやつてゐるんだ。別に威張りたいたも思わない  
よ。そういへば聞きたいことがある」  
「なにさ」  
「このあいだのNEのことだ。君たちはいつもあんなふうにして  
中年をカモにしてゐるのか」  
「カモになんかしてないよ。いい気になつて金さえあれば若い女が  
いうことを聞くつて思つてゐる大人をいじめてゐるんだ。おもしろ  
いよ」  
「おもしろいか。そうだろうな。でも気をつけろよ。私だからあの  
程度で済んだ。もっと危ない奴に当たつたら、大変なことになる」

「大丈夫だよ」  
「大丈夫じゃない。現に私がちよつとしめあげたら逃げていったじゃないか」  
「あれはN Eのオーナーが恐い人だからだよ。ねえ、N Eに行つてお酒飲もうよ」  
「それはだめだ」  
「どうして。今日はあたしの言うことは全部聞く約束だっただろ」  
「もうこれだけ飲んでいるじゃないか」  
「テーブルの上にはからになったワインのビンがある。ほとんどなお子が飲んだのだ。」  
「こんなの、飲んだことにならないよ」  
「君は運転をするだろ。あんなスポーツカーであんな乱暴な運転をするんだ。これ以上飲んで飲酒運転で事故を起こされたら、当分の間寝覚めが悪くなる」  
「本当に気が小さいんだね。事故つたつて死ぬのはあたしだよ。関係ないじゃない」  
「そういう考え方はできないんだ。その代わり私も今日は酒は我慢する。飲むのはまたいつかにしよう。それでいいだろ」  
「つまらない」  
「今日はあれだけ買い物をしておいしいものを食べただろ。それく

らいにしておきなさい。それから、これからは会社には電話をかける。てこないでくれないか」

「何だよ。いい気にならないですよ。あたしに命令する気？」

「そうじゃないよ。あんな電話だと会社の人がいちいちびっくりする。私のプライベートの電話を教えるから、用事があるんならこっちにかけてくれ」

田中はほとんど使ったことのない名前と電話番号だけの名刺を差し出す。

「ふうん。いっとくけどあたしの電話番号は教えなからね」

「かまわないよ。礼儀の問題だから教えただけだ」

「またかっこつけてる」

「それじゃあ、気をつけて帰りなさい」

「まるで親父の言い方だね」  
スポーツカーが走り去るのを見送った田中は、若干の疲労感を感じていた。

その次の週の金曜日、もうすぐ正午になるといふ頃に携帯電話が着信の合図をした。こんな時刻に誰なのだろうかと思つて田中は電話を取り上げる。田中です」

「田中さん、あたし。誰だかわかる？」  
「な お子が無邪気な口調で田中にたずねる。」  
「そういうことで私を試さないでくれ。この電話番号を知っている若い女性ひとりしかいないんだから」  
「へえ、そうなんだ。ねえ田中さん、海に行こうよ」  
「これからかい。まだ仕事があるんだ」  
「今日じゃないよ。明日の土曜日。会社、休みでしょ」  
「土曜は休みだよ。でも海に行く季節じゃないと思う」  
「今頃だからいいんだよ。古浜、知っているでしょ。水がきれいで人もあんまりいないし、とても静かだよ」  
「な お子の言うとおり、この時期の古浜はまだあまり人気がなくてきれいな砂浜が広がっているのを田中は思い出す。」  
「それじゃ、どうしようかな。昼前に私の車で迎えに行くよ」  
「一瞬の間があつてな お子が返事をする。」  
「あたしんち教えないからね」  
「そんなつもりはないよ。君の好きなところで待っていれば迎えに行くから」  
「それじゃあ、えーと。西町の国道沿いにファミレスあるでしょ」  
「ファミレス？」  
「ファミリールレストランだよ」

「ああ、それならわかる」  
「それじゃ十一時に待っているからね」  
また返事をする前に電話を切られた。  
田中はどうしてなお子のようない娘が自分のような中年男にこのように興味を持ったのかが不思議でならないのだが、その一方で自分は何の疑問もなくなお子の誘いに応じていることに自分で気がついていない。

その翌朝、田中は少し遅い時刻に目を覚ましてしばらくの仕事を、疲れが体の奥に残って何となく気分がはつきりしないのを、少しだけ濃いコーヒを飲んで振りが残っていると、いつの頃からか、どんなに休んでも体のどこかに疲れが残っているようなイメージが染みついてしまつて、どうしようもそれをぬぐいきれない。自分はずで若くないのだと覚悟をするのに時間がかかっていたことを田中はあらためて思い出す。  
朝食も食べずに田中は車庫の門を開けてから自分の車の運転席に乗り込んで車を道路に出す。いったん降りて家の戸締まりを確かめてから運転席に戻ってゆっくりと車を動かして始める。陽差しがきつ

国道に出ればしばらく行くと何となく覚えていた家族向けのチェーン店のレストランがあつて、その前に若い女が立っているのを見つけた。そこに車を寄せて運転席を降りると彼女は後ずさりをした。

「おはよう」

田中がサングラスをはずすと、なお子はほっとした様子でため息をついた。

「誰かと思った。田中さん、サングラスかけると恐いんだね」

「これか。こんなに陽差しがきついと道路の反射で運転しづらくなるんだ。そんなに恐く見えるのかな」

「恐いよ。何だか別の人に見える」

「それじゃこれからもう少し気を使うことにするよ。後ろに乗つてくれ」

「どうして？」

「自分で運転するときには助手席には人を乗せないんだ」

「そんなのおかしいよ。若い女と一緒にドライブするのになぜ隣に乗せないのよ。あたし助手席に乗りたいよ」

「それなら助手席に乗っていい。ただしベルトを締めてくれ」

「またいちいちうるさいな」

なお子が助手席に乗って安全ベルトを締めたのを確かめてから、田中はゆつくりと発車させる。

国道をしばらく走っていくとやがて海沿いの道になる。海は穏やかではるか沖の方が明るく輝いている。しかし田中は景色を眺めている余裕はない。

やがてなお子が少しいらしたような口調で話しかけた。

「ねえ田中さん、どうしてこんなにのろのろ走っているの。さっきから追い越されてばかりじゃない」

「これでも制限速度を超えているよ。ほかの車の流れのじゃまにならないように気を使っているんだけれどね」

「お巡りに見つかるのが怖いの」

「そうじゃないよ。これ以上速度を上げると安全に運転できる自信がないんだ」

「これじゃつまんないよ。こんなかっこわるい車でのろのろ走って、これじゃドライブじゃないよ」

「かっこわるくて申し訳ないね。しかし運転が楽で性能がよくて安全な車というと国産車ではこういう車になるんだよ。速く走るだけならこの車は時速二百キロくらいは楽に出るんだけれどね。そんな速さで走れる道はこの国にはないからこの車はきつと最後までその実力を出さないままだろうね」

「それじゃあさ、今度高速道路で走ってみようよ。あたしの車と競

争してみない？」

「そういうことで競争はしない。高校の同級生で免許を取ったばかりで車を電柱にぶつけて死んだ男がいる。免許を取って一週間しかたつていなかった」

「あつし、なんだか田中さんがよくわからなくなってきた。次郎の脅しにびびらなくてNEのオーナーに言うこと聞かせるくらい迫力あるのに、とつても臆病なんでもん」

「強気にならなければいけないときと慎重にならなければいけないとき、その場その場でやり方を変えるんだ。歳を取ってくると人生はそんなふうにややこしくて面倒なものになる」

田中は古浜に行く途中で昼食を食べることにした。数台分の駐車場しなくて建物も昔のままの古くてさえない印象の食堂はまだそこにあつた。

「おいしいね。何だかお店はあんまりかっこよくないけど。田中さん、こういうところも知ってるんだね」

「なお子が田中の勧めた定食の天ぷらを食べながら言う。子供のところに来たことがある。何となく覚えていただけなんだけれど、建物も料理も昔のままだ」

「いいね、いろんなところ知ってるなんて。あたし、この道何回も通っているけどこんな店知らなかった」

「この町で生まれてこの町で育ったからね。町の外に出たのは大学に行っていた間だけだ。長く住んでいるから自然といろいろな店も知っているよ」

「大学ってどこ？」

「東京にある大学だよ」

「東京に行ってたの？それなら東京にずっといたらよかったのに。どうしてこんな小さな町に戻ってきたの？」

「父親と約束していたんだ。家を継ぐからその代わり東京の大学に行かせてくれと父親に頼んだ。ところが東京に行ったら気がゆるんで遊んでばかりで大学は二年も留年してしまっ、いい加減にしないと仕送りを打ち切られて親に叱られて必死で卒業したんだ」

「ねえ、やっぱり大学出ていないと社長さんになれないの？」

「そんなことはないよ。仕事の関係で知っている人で、中学校を出てからすぐに働き始めて必死にならなければならぬ努力して自分の会社を持っただ人を知っている。そういう人に比べたら私は親の跡を継いだだけだから、威張るわけにはいかないよ」

「むずかしいんだね」

「そうだね」

その食堂から車で十数分ばかり行ったところに古浜がある。田中は車を駐車場に止めてなお子と一緒に砂浜に降りた。陽差しが強く、サンングラスをはずすことができない。

「ほら。きれいでしょ」

「ああ、きれいだ」

もうしばらくたつとこの砂浜は人出が多くなってにぎやかになるのだが、今の季節は週末だというのに家族連れやアベックがほんの何組かいるだけだ。かすかに潮風が吹いている。

なお子はサンダルを脱いで裸足になって、水辺に近づいていく。ゆっくりと打ち寄せる波にそつと踏み出してはまた離れる。

「田中さん、水つめたくて気持ちいいよ」

田中は不意に強い既視感に襲われた。昔この砂浜で誰かと一緒に同じことをしていた記憶がある。しかしそんなはずはない。田中が若かった頃この砂浜は見る影もないほど荒廃していたのだ。

なお子はしゃがみ込んで何かを探している様子だ。やがて何かを拾い上げて砂を払い田中のいる場所に歩み寄ってくる。

「ほら。きれいな石」

なお子がさしだした手のひらの中に小さな緑色の丸い石が輝いている。

「これはきれいだね。ちゃんとみかければペンダントにできるかもしれない」

れない」

「うん」

なお子はその石を上着のポケットにしまつて、しばらくしてから口を開いた。

「田中さん、気がつかないの？あたしの服」

「先週買った服だろ」

「だつたら何か言つてよ」

「似合つている。それに着心地が良さそうだ」

「そうだよね」

なお子は無邪気によるこんでいる。

「少し歩こうか」

「うん」

田中はなお子と一緒にゆつくりと水際を歩く。

田中はいつもの間にか自分の足下だけを見つめて歩いてきたことに

気がついてふと顔を上げる。なお子が見あたらない。田中は不安になつてあたりを見回す。いつもそんなことがある。誰かと肩を並べ

て歩いていたりするのにいつの間にかひとりになってあわてて人影を探す

ことが何度もあつた。

なお子は田中の後ろに少し距離をおいて立っていた。しばらくの間

お互いの顔を見つめている。

間

「田中さん、大きいんだね。スタイルいいから今までわからなかった」

「ああ大きいよ。子供のころからいつもほかの子より大きかった」

「それだけ大きくてサングラスかけていると、すごい迫力」

「この頃の若い人はみんな体格がいいからあまり目立たなくなったけれど、昔は大きくて目立っていつも困っていた」

「どうして大きくて困るのよ」

「体格が大きいで何となく子供の中で大人の役を演じるように期待されてしまっただけ。学級委員になれとか生徒会長になれとか、スポーツをやってみるとかいつも何かを押しつけられた。自分は身長が高いだけでまだ子供なのにどうして大人たちは自分に何かを押しつけるようなことをするのかとも思っていた」

「よくわからないよ」

「たとえばこんなことがあった。昔は列車の切符は自動販売機じゃなくて駅員が売っていたんだ。小学校の高学年になったら切符を買おうとするといつも大人の切符を出された。お金が足りないとかわれたこともあった。そのたびに、自分は小学生だから子供の切符が欲しいんだと説明しなければならなかった。そんなことを繰り返していったら何だか大変そうだね」

「だから大人になって、ようやく自分の中身が見かけに追いついたかなと思つた頃には本当に安心した。それに人生は見かけじゃなくて人間の中身のほうが大切なんだというところが少しづつわかつて、この頃になってあまり気にならなくなってきた。だから歳を取るっていうことは悪いことばかりじゃないと思つている」

「変な言い方。まるで年寄りみたいなこと言つている。ねえ、田中さんて何歳なの？」

人に年齢を聞くことは不法だとなお子をたしなめる気にはならない。知りたがる方が自然なのだ。田中は少し考える。

「そうだな。君の想像している年令に十才くらい足してみたらたぶん合つている」

「えーと。田中さんてそんな歳なの？あたしの親父とたいして変わらないことになるよ」

なお子は本当に驚いてゐる。

「それなら合つているよ。子供のころに無理矢理大人扱いされて、歳を取ったら今度は若く見られていつまでたつても若造扱いされる。むずかしい人生だよ」

「何だかかわいそうな話だね」

「そうかもきれないね」

駐車場に戻る途中にある喫茶店で休むことにした。思いのほか長い距離を歩いていたので。窓際の席にすわるとすぐになお子が田中にたずねた。

「ねえ、ビール頼んでいい？ ああ、つき合えなんて言わないよ。田中さん飲酒運転なんてしたくないんでしょ」

「そうだね。私はアイスコーヒーにする」

運ばれてきた缶ビールをグラスに注いで少し口に含んでからなお子が指摘した。

「不思議だね。この町の海岸もこの近くの海もみんなコンクリートで固めちゃっているの。ここだけ砂浜が残っている。まるで宝物だね」

「そうだね」

実はこの古浜を砂浜のままに残そうと提案したのは田中なのだ。半ばゴミ捨て場のようになって、ほかの海岸のように公共事業で埋め立てて固めての課題になって、ほかの海岸のように公共事業で埋め立てて固めてしまおうという意見が有力だったのを、砂浜は砂浜のままに残してゴミはみんな拾えればいい、あとは最低限の施設を用意してみんなで浜を守ればその方が町のためにもなるし結果的に町もうるおうはずだと提案して、ほとんどの人が半信半疑だったのをまず田中自身が社員の手を借りて浜を徹底的に掃除したのだ。その結果見違える

ようなきれいな砂浜が戻ってきて、皆がその気になつて砂浜はそのまゝの方がいいという隣の町からも人がやつてくるようになつた。公  
ヨンの場になつて隣の町からも人がやつてくるようになつた。公  
共事業の一次的な金よりもこのまにか周りに金も薄く広がらる  
ようになつて。そしてこの目だと思われたい田中が実は町の  
大きな顔をしていて。それだけで二代目だと思われたい田中が  
ことを親身になつて考えている人間なのだ。周囲の人々に気づかせ  
るきっかけになつたのだ。  
のもでもない。大学のゼミで荒廃した寒村をどうやって再生させるか  
というケーススタディーの課題が出たとき、ほかの学生が公共事  
業で規模開発をして貨物基地にするとか、リゾートの同級生の原田が市  
を図るという提案をして保護すること、地域の生活を守るといふあたり  
民が参加して自然を保護すること、地域の生活を守るといふあたり  
にも素朴な提案をしたのだ。その提案には課題を出した講師さえも  
どう判断していいのか迷つた様子だったのだが、田中は田中で会  
育ちの原田がどうか迷つた様子だったのだが、田中は田中で会  
た記憶がある。そんなことがあつたから後になつて古浜をどうすれ  
ばいいかというところが話にあがつたとき、原田の考えた市民参加  
型で自然保護を柱にした自給自足型の町作りという提案をそのまゝ

口に出してしてみたのだ。結果的にはそのような方法が有効であることが証明されて、町作りの手本のひとつとして全国にまで有名になった。しばらくしてある大学の研究室のメンバーが調査にきて詳細に調べてみた結果、この砂浜は潮の流れの關係でこのままでは五十年後に消滅するという報告が出されて、砂浜を保護するためには沖に潮の流れを変える特殊な防波堤を作るといふ事業が決定され、一番潮の引いたときにだけ海面に現れる防波堤というおそらくきわめてむずかしい工事に予算が付いた。最初の頃はせつかくの公共工事の機会を失った田中を恨んでいた。地元の建設業者が、かえって高価な工事を受注することができた。田中に感謝するといふ結末までついてきている。そのようなことがあるから、遠回しながら田中は原田にひとつ借りがあることになる。しかしその借りはいつい今日に至るまで返す機会がない。返すことのできない借りといふものがあることを田中は古浜に来るたびに思い起こしてならない。

喫茶店を出て駐車場に向かう頃には日が暮れかかっていた。帰りの車の中でなお子はカーオーディオを何となくいじっている。

「ねえ、CDないの」

「そこに何枚か入っているよ」

「ここ？」

なお子はコンパートメントを開けて中にあった何枚かのCDを取り出した。

「英語ばかりだ。全然見たことない」

「学生の頃聞いていた歌だからね。みんな昔の歌だ」

「ねえ、これ聴いてみていい？」

「どれでもいいよ。使い方はわかるかな」

「これくらいわかるよ。えーと」

なお子がCDをスロットに差し込むと自動的に再生が始まった。ストリングスの前奏に続いて聞き覚えのあるアルトの歌声が流れ始めた。

「きれいな声の人だね。これ誰？」

「カレン・カーペンター。カーペンターズは知らないか」

「知らないよ。聴いたことない」

「そうだろうね」

田中の音楽の趣味は学生の頃で止まってしまっている。カーペンターズ。サイモン・アンド・ガーfunkル。イーグルス。デイブ・パール。あれだけ大騒ぎされたビートルズの歌は初期の頃の曲だけ覚えていて彼らからミュージシャンというよりもある種のカリスマになってしまっただけから心は離れた。レコードがカセットテープになりCDになり自動車の音楽が楽しめるからと思

「中は最近そのカーオーディオ装置を必ずつけるのに、気がつくとならぬ歌を同時代で聴いていた頃に隣の席に座っている娘がようやく生まれかそれともまだ生まれていなかったことになる。ほんとうに何と古い趣味なのだろうか。」

「約束していたね。今日は夜までいいかな」

「何？」

「N Eに飲みに行く約束をしていたら」

「あたしはいけれど、田中さん運転しているじゃない」

「約束は約束だから」

「田中さん不思議な人だね」

「たぶんそうなんだろうね」

「C Dを半分まで再生したかという頃に市営の駐車場に到着してしまった。」

「N Eに行く前に夕食を食べることにした。田中はなお子を駐車場から近くの和食の料理店に連れていった。町にある名門の割烹旅館の料理長だった人がのれんを分けてもらう形で開いている店だ。有名になって味が落ちてしまわないように苦労していると聞いている。」

「田中さん、このお刺身おいしいよ」

「うん」  
なお子が差し出した皿から田中は一切れだけ箸で取る。  
「田中さん、和食が好きなんだね。昼間もそうだった」  
「そういえばそうだね。自分では好き嫌いもなかったつもりだったんだけれど、東京に行ったらおいしい魚がなくてつらい思いをした」  
「東京ってそんなに違う？」  
「たとえばこの料理を東京で頼んだら、値段は二倍くらいになるんじゃないかな。それでいてこれほどおいしくない」  
「そんなに高いの？」  
「高いよ。東京は何もかも高い。借りていたアパートは狭くてどこに行っても人が多すぎてあまり暮らしよくなかった。この町ぐらいの大きさがちょうどいいよ」  
「それなのに東京の大学にずっと行っていたんでしょ」  
「そうだね。今になってみるとなぜだかわからない」  
「あつし東京に行ってみたい」  
「修学旅行で行かなかつたか」  
「中学校のときは京都と奈良までしか行かなかつた」  
「高校は？」  
「あつし高校行かなかつたもん」  
少し会話に間があいた。

「新幹線があるんだから今からでも東京には簡単に行けるんじゃないかな」

「だって東京まで行って見たいところじゃないし」

「そうか。そんなに金がかかるんだ。若い頃にほんの少し住んでみるのはいいかも知れない。でもいつまでも住み続けるところじゃないよ。大学の頃の東京生まれで東京育ちの友達は、ほんとうの東京人は盛り場なんかに行かなくてすみっこの方で小さくなって隠れているって言うていた」

「なんだか田中さん、東京の悪口ばかり」

「そうかな。むかし私が学生だった頃の東京はそんなだった。今はもっとと人が多くなっているみたいだよ」

「むかしか。むかしなんてわからない」

「食事を終え、その料理店を出てなお子と一緒にNEに向かう途中で田中はあることに気がついた。

「今までのが全部わなでこれNEに行ったら君の仲間が待ちかまえていて私が袋叩きにあつたらおもしろいんだろね」

「田中は半分冗談で言つたつもりなのになお子はなぜか怒つた。

「ひどいよ田中さん。あたしそんなことしないよ。次郎たちは岡山に行くつて言つてたから田中さん誘つたのに」

「ああそうだね。君はそんなことはしない」

十分と歩かないうちにN Eに到着する。この店は土曜日の晩でも開いている。そもそも休みというところがないのだ。そういう規範をオーナーが自らに課しているらしい。田中がドアを開ける。

「オーナー、こんばんわ」

「田中さん、珍しいですね」それからオーナーはなお子が一緒なのに気がつく。「ゴルフじゃなさそうですね」

「今日は彼女に誘われて古浜まで行ってきた。いつものやつくれますか。ウオツカをオレンジジュースで割ったやつ」田中はカウンタに向かつて腰かけながら注文する。

「あたしも同じやつ」なお子が田中の隣りに腰かける。

「オーナーがふたつのグラスを冷蔵庫から取り出しながら言う。

「古浜ですか。それで顔が日焼けしているわけだ」

「そんなに焼けているかな」

「目立つほどじゃないけれど赤いですよ」そう言いながらオーナーはふたつのコースターをカウンターの上に並べる。

「田中さん、原宿行ったことある？」なお子が無邪気に質問する。

「行ったことがあるのかも知れないけれど忘れた」

「それじゃ代官山は？」

「そこは絶対に行ったことがない。あそこはただの高級住宅街だったはずだ」

「田中さん東京にいたのどこにも行ったことないんだね」  
カクテルができあがってコースターの上に置かれる。

「そんなことはないよ。週末になるとときどき同級生を誘っているいろなところドライブに行ったり映画を観たりしていた」

「ガールフレンド？」

「ガールフレンドというのとは少し違うな。同級生の中に女の子がひとりいて、私を含めて男三人がいつも彼女のそばにいて、何かあるといつもその四人で行動していた」

「友達は三人だけだったの」

「ほんとうに親友と言えるのはそれくらいだった」

「友達が三人しかいなかったなんてかわいそう」

「多ければいいっていうものじゃないよ」

田中は少しだけカクテルを口に含ませる。

「それでその友達は今どうしているのよ」

「どうしているのかな」

「思い出すと切なくなるのがわかっているので田中は思い出したくない。」

「よくわからないな。ねえオーナー、お代わり！」

気がつくとなお子はすでにグラスを空にしていた。田中は余計なことだと思いつながら忠告したくなってしまう。

「この前も言わなかったかな。このカクテルはノックアウトカクテルだぞ」

「ノックアウトって何さ」

「それは、えーと。オーナー」

うまく説明できない田中に代わってオーナーが説明する。

「下心のある男が女をはめるために強い酒をジュースで薄めて飲みやすくする。女が気がついた頃には酔いが回っていて手遅れになる。カクテルなんでものはそういうことのために発明されたようなものだ」

オーナーは新しく冷えたグラスを用意している。

「それじゃ田中さんは女の飲むようなお酒を飲んでるんだ」

「そういうことだ。この間のことなんだけれど私は酔っぱらってどうなったのかな」

「ほんとうに覚えていないの」

「思い出せないんだ」

「化粧が気に入らないとか服が気に入らないとか髪型が変だとか音楽がうるさいとか、全部けちつけていたよ」

「それはひどいな。昔はそんなことは言わなかったはずなんだが」



ほんとうに欲しいものを手に入れた人の方が偉いんだ」

田中はなお子の脈絡のない質問に言葉を選びながらいていねいに答えていく。いつのまにかオーナーが気を利かせて店内の音楽のボリュームを小さく絞っている。夜が更けていく。

「こんな時間か。そろそろ帰ろうか」

「うん。おいしかった」

「オーナー、これで帰るから勘定」

「あとでもいいいんですがね。今いただけるとありがたいです」

外に出ると看板の明かりはすでに消えていた。田中となお子が最後の客だったのだ。

田中はなお子と一緒に駐車場まで歩いていく。

「今日は送っていきましょう」

「田中さん、飲酒運転しないんじゃないよ」

「カクテルを半分飲んだだけだよ。それで自分がどうなっているかはまだ自分でわかる」

「その代わりにあたしは後ろの席に乗らせていうんでしょ」

「どうしてわかった」

「あたし田中さんの考えていることわかるんだ」

なお子は無邪気に微笑んでいる。

る。田中は車を駐車場から出してなお子を後ろの座席に乗せ国道に出

「今日君を乗せたところでもいいのか」

なお子は何かを言いたそうな表情をしてから答えた。

「うん。あそこでもいいよ」

まだ明かりがついて営業中のファミリーレストランの前に車を止めた。

「ここからの帰り道は大丈夫なのかな」

「うん。大丈夫だよ」

「それじゃ気をつけて帰りなさい。今日は楽しかったよ」

「あたしもだよ。それじゃね。ばいばい」

なお子は笑顔で手を振ってから歩き去っていった。

田中はそれを見送ってから大きくため息をついた。酒を飲んで誰かを車に乗せて運転するなどということは普段の田中は絶対にしないことなのだ。自分はどうしてしまっただろうか。なお子のような若い娘が無邪気に自分のような中年に関心を持つてくれたことにまああらためて驚いていた。そんな経験は覚えていた限り皆無だ。田中は冷静さを取り戻すためにしばらく運転席で時間をやり過ごさなければならなかった。

深夜。

疲れて寝入ったところを電話の着信音で起こされた。

「おじさん」

「君か。こんな時間にどうした」

「おじさんに買ってもらった服」

「なんだ。あんなに一生懸命選んだのに一度着ただけで気に入らな

くなつたのか」

「破かれちゃったの」

「誰にだ」

「次郎。靴もバッグもナイフで切られたの。次郎、あたしの部屋め

ちやめちやにしていったの。あたし、帰るところないの」

「わかつた。今どこにいる」

「南町公園の前の公衆電話」

「そこを動くな。今すぐ行く」

田中は部屋着のまま、珍しく自分の車で家を飛び出していく。安

全運転どころではない。あの声の様子では彼女は今にも何をするか

わからぬ。どうして自分があんな小娘の心配をしているのか、田

中自身にもよくわからないのだが。

公園の電話ボックスのそばに赤いスポーツカーが雨に打たれて停

車している。室内灯は消えている。田中は車を降りてスポーツカー

の窓を叩く。  
「私だ。ドアを開けなさい」  
ドアが開いた。  
田中は車内に入り室内灯のスイッチを探して点灯する。なお子は顔をそむけた。  
「どうした。殴られたか」  
「なお子は首を横に振った。」  
「そうか。電話の様子で心配した。よかった」  
「よくなかないよ！」  
「そうだな。あんなに一生懸命に選んだんだ。お気に入りの服と靴とバッグ、全部やられたらくやしいだろ。でも私はまだ多少の余裕はある。また買ってあげるよ」  
「そんなんじゃないよ馬鹿！」  
「馬鹿だって。それはひどい言い方だな。親にもいわれたことはないのに」  
「ごめん。あたしは、おじさんが無理してあたしにつきあって、あたしと一緒に選んでくれたから、大切にしようと思っただけなら、金で済む話なのに、ちゃんとなつて。次郎の相手をしてくれて。お金のことなんかじゃないよ。次郎のやつ。次郎の馬鹿野郎」

なお子はくやし泣きをしている。言っていることが次第に意味不明になつてきた。

「わかつた。もう泣くな。部屋はどうなつていつて言つた」

「家具が全部ひっくり返つて、コップやお皿が割れて、床が見えないの」

「それで帰れないか。ご両親の家はどこだ」

「隣町だけど何年も帰つたことない」

田中は考へた。

「よし、それじゃあ私の知つているところに泊まりなさい。部屋はあとで片づけければいい。今の君に運転は無理だ。私の車に乗りなさい。ホテルに電話を入れる」

「おじさん、もうそんなに無理しなくていいよ。そんなにやさしくしてくれろと怖いよ」

「君の恋人がか」

「違うよ」

「私がか」

なお子は黙つておびえた目で田中を見ている。

「電話を掛けてきたのは君じゃないか」

「でも」

「そうだよ。確かに私はかなりむちゃをしている。自分でもなぜだ

かわからない。でもこのまま君を置き去りにして帰れると思うか。それに女を泣かせる野郎は気に入らない。たとえ君の恋人でもだ」

「まさか、次郎をどうにかするっていうの？」

「黙って私の言うことを聞け」

「田中の声が初めて気迫を帯びた。」

「はい」

なお子が初めてしおらしい様子を見せた。田中はなお子を自分の車の後部座席に座らせて、運転席から携帯電話で知り合いのホテルに電話を入れてなんとか部屋を取ってもらった。親の代からの知り合いだから無理を聞いてもらえろ。やれやれ。田中のしていることは親の代の方々への貸しを喰いつぶしているようなものだ。

ホテルの支配人は妙な気を回したのか、よりによってダブルベッドの部屋を用意していた。田中はそんな男ではないことをわかってくれない。でもさそうなものだ。

「今日はここで休みなさい。なんならしばらくのあいだここに泊まっています。いい。それくらい無理を頼める余裕はまだある」

「なお子はすっかり打ちひしがれた様子で、ベッドに腰掛けています。君のアパートの鍵と車の鍵を渡しなさい。アパートは片づけさせ

て、君の車はホテルの駐車場に回しておく」  
「なお子は黙ってキーホルダーを田中に渡した。」

「それじゃお休み」

田中は部屋を出ていこうとする。

「待って。帰らないで」

「どうした」

「一人にしないで。怖い」

これだから田中には女の気持ちは分からない。さっきは田中を怖  
れていながら今度は田中にすがりついてくる。矛盾しているじゃない

いかと思いつながら、田中は拒めない。

「いいよ。もともと私が君を散々かまったからこんなことになった  
んだ。君がこんな目にあつたのは私に責任がある。ここにいろよ。」

だからゆつくりお休み」

なお子が泣き寝入りするのを待って、田中はそつと部屋を出てい  
く。

田中は深夜の担当のフロント係に、チェックアウトの時間を過ぎ  
てもなお子を起こさないでくれと頼んで、それから自宅に帰った。  
何で俺がこんな事をしなければならいんだと思いつながら、夜明け  
までの短い時間を眠った。

なお子は昼過ぎまで眠り続けてようやく目を覚ました。あわててフロントに電話を入れると、代金の精算はすんでいるしあと数日の予約も取ってあるという。かんじんの田中は昨日の深夜過ぎに帰ったそうだった。

なお子は自分がまともに相手をされていたのか、気まぐれでかわられていたのかをただけなかわからなくなり混乱した。そのとき誰かが部屋のドアをノックした。

「田中さん？」

「いいえ、田中の部下の佐伯です」

いきおぼえのある声にドアを開けると、一度会ったことのある男性が立っていた。

「社長は所用でこられませんので、私が来ました。あなたのアパートと車の鍵を預かっています。アパートは会社関係のものに片づけさせました。車はこの駐車場に回してあります」

「ありがとうございます」

なお子は田中に自分のアパートの住所を教えなかったことに最後まで気がつかない。

「社長からの伝言なんです、あなたの恋人はまだ怒っているかどうかから、しばらくの間アパートには帰らない方がいいんじゃないかという事でした。それからこれは私からのお願いなんです」

「何？」  
 「社長はあなたのことをとて心配している。あなたの方には困っている人を見たと放っておけない人です。しかし私はあなたにあまり社長に近づいてほしくない。あなたには見かけほど悪い人ではない。味じやありませんよ。あなたとつきあうと社長は歯止めが効かなくなるのが目にみえてはいる。あなたも純情な人だから。あの方が傷つくのをみたくはない。それにあなただから。あのつてけっしていい思いばかりはしなかつた。それは今度のことでわかつたでしょう。」  
 「はい。」  
 「私だけの身勝手なお願いなんです。社長とはもうこれ以上つきあわないでもらえませんか。手切れ金なんてものを払うとかえってあなたに失礼にあたるし、社長に知られたら怒られますから、金を出しません。その代わりこの部屋にはいつまでもいていい。そして社長の前から消えていただけませんか。」  
 「はい、わかりました。」  
 「約束ですよ。」  
 「はい、いろいろとお世話になりました。」  
 佐伯が帰っていろいろとあとなお子はベッドに腰かけてしばらくの

間ぼんやりとしていた。  
これだよかったのだと思うと同時に、もう田中には会えないのだ  
という思いがなお子の心をとらえてはなさなかった。なお子は自分  
のほおが涙でうつすらとぬれていることに気がつかない。

そしてまた別の夜。

田中は佐伯の運転する車で帰る途中に、気になるものを見た。

「佐伯さん、ちよつと止めてください」

佐伯は広い通りの左端に車を止めた。

「どうしました」

「通りの向こう側、見てください」

「けんかですね」

歩道で数人同士の若い男女がにらみ合っている。

「堅気じゃない」

「ちんぴらですね。ちよつとしたいさかいじゃないですか。放つて

おいてもかまわないんじゃないですか」

「最近の若いのはけんかの仕方を知らない。すぐに刃物を出す。血

を見るのはいやだな」

「わかりました。近くに誰かいるでしょう」

佐伯は携帯電話で連絡する。

一分もしないうちにどこからともなく初老の男が二人現れてけんかの中に割って入った。何の道具も持たず手も出さないのに、その迫力に圧倒されて集団は次第に二つに引き離されていく。とうとう両方とも逃げ出した。残った二人は何か言葉を交わしたあとまたどこかに消えていった。

様子を見ていた佐伯が事の次第を見届けてからため息をつく。

「老人会の自警団だ」

「そんなことはありませんよ。あの人たちはまだまだこの町のお役に立っている」

「でも社長、みんながとまどっているのも事実なんです。昔ならそれなりのものをいただいているからやるべきことはやるっていう理屈があった。今は、確かに何不自由はないんだけど無料奉仕だ。どこかよくわからないって時々こぼしてます」

「まわり回って結局は会社の得になっているんですから、わかってほしいんですけど」

「むずかしいですねえ」

「残ってくれた数少ない人たちだ。最後まで面倒は見ますよ。ところで気がつきましたか」

「なんですか」

「片方のグループの中にあの娘がいた。次郎っていう男と一緒にだっ

た」

「なおい子っていいましたか。気がつきませんでした。確かあの娘を  
ひどい目にあわせたのはその男じやなかったんですか」

「わからないな。あんなことをされたのに、まだ一緒にいるなんて」

「それだから男と女なんですよ。理屈じやない」

「そうなんだろうけれど、やっぱり私にはわからない」

佐伯は返事をせずに車を走らせ始めた。

今夜は佐伯はいない。仕入れの打ち合わせで神戸に泊まりがけで  
出張している。

田中は先月の収支報告書とこの次の四半期の事業計画書に目を通  
している。

一人きりで仕事をしているとき、田中はどうしても原田のことを  
思いだしてしまう。原田ならこういうことは簡単に片づけてしま  
だらう。あいつは私よりはるかに才能があった。

原田がこの町にやってきたとき、田中が原田に会ったのは偶然だ  
った。そのとき原田はすでに大会社の職を投げ捨て、目的もなくい  
ろいろな土地をうろろしていた。田中が原田に、自分の会社に来  
ないかと声をかけたのは、せっかくの才能をどうしていいのか自分  
でわからず途方に暮れている原田を見るに見かねて、昔の友人とし

て何とかしてやれないかという気持ちもあったが、その一方では本  
当に原田の才能を必要としていたのだ。しかし原田は断った。会  
社というものが嫌いだし、田中のしていることも嫌いだと言った。  
その当時田中の会社はまだ昔の体質から抜けきっていなかった。田  
中はそれを原田の昔ながらの度を超した潔さだと解釈した。同時に、  
原田が迷いから抜け出してからでも遅くはないと考えた。田中は無  
理強いはしなかった。

今になって田中は思う。もしもあのとき無理にでも原田を引き留  
めておけばどうなっていただろうか。あれから起こった悲劇の責  
任はすべて自分にあるのではないか。

しかし、原田はもういないのだ。いない人間のことを考えてもし  
かたがない。それに友人として、必要以上に原田の生き方に立ち入  
るのを田中は好まなかった。原田もそうだったろう。

田中は感傷を打ち切って、書類に決裁印を押してケースに戻した。  
今夜はどうしようか。家に帰ったところで誰も待ってはいない。  
田中は佐伯専務の再三の忠告を気にしながら、それでもついNEに  
行ってみようかと考えてしまう自分に苦笑する。

NEの前に行く、田中が無意識に期待していたとおり、あの赤  
いスポーツカーが駐車してあった。その時になってようやく、この

場所にはトラブルも待っているのだという事に気がついて、自分の馬鹿さ加減にあきれた。とにかく店に入ってみれば何かがある。

店の入り口のドアを開けると、予想に反してあのちんぴらたちはいなかった。客はほとんどいない。店のオーナーが、カウンターに向かつてつぶれかかっている客を見て、どうしたものかと思案している様子だった。

オーナーが田中に気がついて軽く右手をあげた。それを見てカウンターの客が振り向いた。

なお子だ。

田中が、こういう時はどう振る舞えばいいのか一瞬考えたその直後、とんでもないことが始まった。

「よお！社長、商売儲かっているか！」

何なんだこの女は。

田中は距離をおいてカウンターに席を取り、オーナーを手招きした。

「オーナー、いつから飲んでる」

「明るいうちからですよ。このところ毎日ずっとこうだ」

「何を飲ませている」

「田中さんがいつも飲んでるカクテルですよ。同じものをどうしても飲ませろって私を脅かすんです。この私をですよ。言っておき

ますがつけは全部田中さんについていますからね」

田中は反論できない。なお子をここまで追い込んだのは自分なのだ。

「何杯目」

「あれで七杯。全部ダブルだ」

「それはむちゃだ。俺だつてそんなに飲んだことはない」

「こら！ひとに隠れておやじ二人が何かそこそ話してんだ！」

なお子は完全にあっちがわに行つてしまつてゐる。

「途中からオレンジジュースにしたつて、あれじゃわからないだろ」

「田中さん、私のやり方は知つてゐるでしょ。客に言われたものは

ちゃんとする。それを飲んで客がどうなつてもそれは客の責任だ。

店の名前には二つの意味があるんだ」

「そうだったな。ノー・エクスキューズは客へのいましめでもある

んだ。酔っぱらつてどんなはめになつても言い訳するな、だろ？」

「こら社長！日本語でしゃべれ！ここは日本だぞ」

なお子がいつの間にか田中の後ろに立つてゐた。

「おどろかすなよ。どうしてそんなにあれてゐる」

「ふん。知らないね。薄情だぞお前。ひとが毎日ずっと待つてやっ

てゐるのに、いちどもきやがらないで」

「こうして来ているじゃないか。だからもう飲むな」

「やだ。オーナー、もう一杯ちょうだい」

「だめだ」

「客の注文がきけないって言うのか。生意気だぞ」

「ほかの客に迷惑をかけるなら出ていけ」

「社長。こいつに何か言っちゃってよ。あたしの言うことがきけないっていうんだよ」

なお子は急に甘えるような声になる。

「いや、オーナーが正しい。今日の君はどうかしている

「なんだよ。おじさんまであたしをいじめるのかよ。ひどいよあんまりだよ」

なお子は急変して今度は泣き出した。これはもう手に負えない。

「今日はもう帰りなさい。そんなになっっている君を見ていたくない」

「わかったよ。もう来ないよ。こんな店つぶれちまえ。社長も倒産しろー！」

なお子はあちらこちらにぶつかりながら、ドアに向かおうとしている。

「オーナー、賭けようか。ドアにたどり着く前にぶっ倒れるぞ」

「賭は成立しませんよ。私も同意見だ」

予想の通り、なお子の右手はドアのノブを空振りして、それからなお子は勢いよく仰向けにひっくり返った。大の字になって意識を

失っている様子だ。

田中とオーナーはしばらくの間お互いの顔を見ていたが、結局田中が負けた。

「彼女の今までのつけは全部俺が持つ。今夜は俺が彼女を連れて帰る。そういうことだな」

「そうしてください」

何でこうなるんだと思いつつ、放つてはおけないというのが田中の性格なのだ。

「早く起きなさい。もう日は昇っているぞ」

田中は寢室の窓のカーテンを勢いよく開ける。

「ぎゃ！」

なお子はまぶしさのあまりベッドの中にもぐり込む。

「ここどこ？」

「私の家の寢室だ。ホテルになんかつれていたら今度こそ信用をなくす」

「私って？あ、田中さんだ」

「ようやく気がついたのか。それじゃ昨日何があったか覚えていないだろう」

「なんであたしが田中さんの家にいるの。きゃー、あたしの服！」

「あのままじゃ自分の服まで汚しそうだったから無理やりはいんだ。こっちの身にもなつてくれ」

「あたしに何したのよ！」

「何もするもんか。あんな酔っぱらい、誰が好きこのんでどうにかしようなんて思う」

「そんなにひどかった？」

「覚えていないんなら思い出さない方がいい。これを飲みなさい」

「何これ？」

「中年用の二日酔いの薬だが、今の君にはちようどいいだろう」

「うわっ、すごい臭い」

「さっさと飲みなさい」

「うわー苦い」

「自業自得だ。そこにあるコーヒを飲んでシャワーを浴びたら朝食を食べなさい。まともなものをろくに食べていないんだろ。バス

ルームは廊下の右奥、食堂はこの部屋の左隣だ」

「あれをしなさいこれをしなさいっていちいちうるさいな。今何時？」

「もうすぐ八時だ」

「まだ夜中だよ」

「少なくとも私の家ではとづくに朝だ」

「はいはい、わかりました。うー、頭痛い」

あれだけ飲んだというのになお子は平然とした顔で食堂に現れた。

「若いっていうのはうらやましいな。あんなむちゃをしても平気なんだから」

「平気じゃないよ。まだ頭痛い」

「私だつたらとつくに死んでいる」

なお子は田中のいうことを気にせず、食卓のいすに腰かける。

「卵焼きと味噌汁か。奥さんが作ったの」

「違うよ。朝食は自分で作るんだ」

「そういえばそうだ。奥さんがいたらあたしをうちに連れてくるなんてできるはずないもんね。田中さん独身？」

「家内は事情があつて遠くにいつているんだ。しかたがないから朝食は自分で作ることにしている。無理はしなくてもいいから食べられるだけ食べておいた方がいい」

「かわいそうに。別居生活か」

「大きなお世話だ」

「おいしい。田中さん料理上手だね。ほんとにへんな中年」  
「食べながらでいいから、教えてほしいことがある」

「何？」  
「君は働いていないのか？」  
「働いた事なんてないよ」  
「それじゃなんであんな高級な車に乗っている？」  
「親を脅かしたんだ。あたしのいうことを聞かなかったらどんなことになるか覚悟しろって」  
「それじゃあ生活費も親からしぼりとっているのか？」  
「うん」  
田中はため息をつく。  
「君のような娘がいなくて本当によかったよ」  
「大きなお世話。おかわり」  
「あきれた食欲だな。昨日の今日でよくそれだけ食べられるよ」  
「うらやましいか」  
「年をとるとあまり食べなくてすむようになるんだ。君にもそのうちわかるよ」  
「そんなに長生きするつもりないよ」  
「そういつていられるのも今のうちだ」  
なお子は田中のいつていることを意に介していない。  
「よくわかかんないけど大きなうちだね。田中さんて本当に本物の社長さんなんだ」

「大して大きくはない。それに親の代からの古い家だ。私が建てたんじゃない。大きいと手入れが面倒だし私一人ではもてあましている」

「じゃああたしが住んであげようか」

「からかわないでくれ」

田中は少しうろたえる。

「何本気にしてんだよ。へんなやつ」

田中はわずかな食事で空腹が満たされる。なお子の旺盛な食欲をうらやましそうに見ている。

「あーおいしかった」

「今日はこれからどうする」

「わかんない。たぶん夜になったらまたどこかに行く」

「そんなことができるのも若いうちだけだろうな」

「あたしの勝手だろ。でもまだ眠い」

なお子は大きなあくびをした。

「眠いなら、あの部屋でまだ寝ていていい。私はそろそろ出かける」

「おじさんほんとにお人好しだね。留守の間にあたしがこのうちのもの全部もってつたつておじさんの責任だよ」

「持って行かれて困るようなものはないよ。ただし二階にはあがないでくれ。家の鍵は郵便受けの中に放り込んでおけばいい」

「はい」

田中が出かけて、数時間うたた寝をした。なお子は昼近くになってようやく目を覚ました。寝室から出ると小さいなお子は手入れの行き届いた庭の木々の葉が陽光を受けて鮮やかに輝いていた。なお子はしばらくのあいだ家の中をうろく歩き回った。しかし田中にはおれなことが気に入って二階に行くことはためらわれた。なお子は不思議な印象を感じていた。きれいに片づいているけれど何かは足りないような気がした。なお子に想像力があればそれが田中の心理を反映したものであることに気がついて田中の孤独に思い至ったのかも。しれないが、なお子はある意味でまだ子供だった。

久しぶりにまともな朝食を食べたというのに、なお子は空腹を感じていた。自分の車はガレージに止まっている。昼食を食べて出かけるようかと思っただけ、隣の食堂のテーブルの上には鍵が置いてあるのを見つけた。しかしその隣の田中の財布が置いたままになっていて。実は田中にはあがっていらただ。その財布を見てなお子はあることを思いついた。

なお子はスーパーマーケットの野菜コーナーの前で、カレーライスにはどんな野菜が入っていたのかを一生懸命思いだそうとしてい

る。田中にさんざん迷惑をかけたお詫びとお礼に自分で豪華な料理を作った。驚かせてやろうと思つたのだが、お礼は自分で料理したい。母親には料理なんて教わつたことがない。それでかたなく、ただひとつ自分の家の前の坂道を下つた。アイスとサラダを作ることにした。高いが吟味したものがそろえてある。小さなお子にも何となくわかつた。お子は田中の家に戻つて、台所に入つて買つてきた材料をひろく切るだけでも大変な仕事だ。自信がない。野菜を洗つて皮をむいて箱の裏に書いてある説明を読みながら、お子はカレーの作業を進めていく。あくをとると、最初は何のこともだかわからなかつた。調理を進めていくうちに材料が多すぎる。ことにやう気がついたので、何とかがカレーらしいものがないか。お子はうれしくなつた。お米を研がなければいけない。先にご飯を炊いておけば段取

りが早くすむなどということはなお子は気づいていないのだ。け  
さ炊いたご飯はなお子がすつかりからにしてしまっている。なお子  
はむかし母が独り言のようにつぶやいていた、お米は少しだけ炊く  
とあまりおいしくないという言葉を思い出した、お米の分量を考え  
た。研ぐというのと洗うのはどう違うのかもよくわからなかった  
が、母が食事の支度をしていたときの様子を思い出しながらそれら  
しいまねはできた。水の量は炊飯器の盛りを見ながら測ったが自  
信はなかった。どうかにか食べられるものはできるだろう。自分  
きることはそれくらいなのだ。わりきるしかなかった。  
炊飯器のスイッチを入れてからサラダの用意をする。サラダとい  
つてもレタスとキュウリとプチトマトだけの簡単なものだ。材料を  
調べてサラダボウルに並べてからラップでふたをして冷蔵庫にし  
まった。ドレッシングは買って冷やしてある。  
やっとな完成だ。なお子はほっとしてついたばこを吸いたくな  
が灰皿にするようなものは見あたらない。それにはここは田中の  
家だ。あまり勝手なことをしたら田中に悪い。なお子はたばこを我  
慢した。  
そこで初めてなお子は自分が料理に熱中するあまり、かんじんの  
自分の食事をすることすつかり忘れていたことに気がついた。時  
刻はもう三時をとつくにまわっている。料理の準備にこんな時間



ドレッシングは出来合いのものを買うしかなかったのだらう。  
カレールイスはおいしかった。ありきたりのビーフカレーだ。と  
りたててどこかの店のカレールイスに比べておいしいということは  
なかったのだが、田中にとっては久しぶりの家庭料理だ。何年も食  
べたことがない。家庭料理でしか味わえない味だ。野菜は少し生煮  
えで底の方は少し焦げている。トマトピューレを入れても少し煮  
込めばもつといい味になるだろう。しかしそんなことは問題ではな  
い。サラダはよく冷えていた。たとえドレッシングが出来合いのも  
のでもなお子の心遣いがうれしかった。田中は本当になお子に  
レールイスを二杯食べた。食欲の問題ではない。なお子の  
気持ちがうれしかったのだ。田中は本当になお子に対する感謝の気  
持ちでいっぱいだったのだ。

翌日の昼、会社にいる田中の携帯電話に電話がかかってきた。き  
つとなお子だ。  
「こんにちは」  
「やあ君か」  
「カレールイスおいしかった？」  
「ああおいしかったよ。あんなにおいしいのは久しぶりだ」  
「お世辞なんか言わなくてもいいよ。あたし料理全然したことない

「の」  
「そんなことはないよ。どんなにおいしいレストランでもくらべられない味だよ」  
「だったらいれしいな。でもちよつとたくさん作りすぎたね」  
「それはいいんだ。カレーはね、一日くらい寝かしておいた方がもつとおいしくなるんだ。何日でも食べられる」  
「田中さん買いかぶりすぎだよ」  
電話の両側で二人が幸福な気分浸っている。  
「ただ一つ残念なことがあるんだだけけどね」  
「何なの？」  
「台所は家内の場所なんだ」  
「なお子がしばらく黙り込んだ」  
「どういうこと？」  
田中は自分がまずいことを言いかけていることに気がついた。しかしなお子に気を許すあまり、馬鹿正直に言っただけならいいことを言ってしまった。  
「台所は家内の場所なんだ。私だって気を使っているんだ」  
口に出してから初めて自分の言ったことの意味に気がついた。なお子の緊張が伝わってくるようで恐かった。  
「そんなに奥さんが恐いの」

「いやそういうことじゃないんだ」  
「そんなに奥さんが恐いんならどうしてあたしを連れ込んだりするの」  
「連れ込んだ訳じゃないと言おうとしたが、言葉の問題ではないのだ。なお子の静かな声が恐くて何も言えなかった。」  
「田中さんのしていることむちゃくちゃだよ。やさしくしたり、今度は訳の分からないこと言ったり、いくらあたしが頭悪くたって田中さんのしていることひどすぎることにくらいわかるよ」  
「わかるかったよ。忘れてくれないか」  
「そんなことですむと思っっているのかよ。ひどすぎるよ。あたしあんなに一生懸命料理作ったことなかったんだよ。ほんとに一生懸命作ったんだよ」  
「なお子の最後の声はほとんど叫び声に近かった。電話が切れた。田中は深いため息をついた。後悔の念があふれてきた。なぜ何も言わずになお子の素直な好意を受け止めてやらなかったのか。田中は大事なものを失った気がした。行き止りのほんの数回しか会わなかった小娘だというのに、かけがえのないものを失った気持ちがかつた小娘だというのに、かけがえのないものを失った気持ちがないもの。自分を持ちがったわらな。電話を切ったから泣き続けている。自分の気持ちをつらな。電話を切ったから泣き続けている。自分の気持ちをつらな。」

なかつたのが悲しかったのか。自分でもなぜ泣いているのかわからなかつた。田中がいったい何を言いたかつたのか、田中の気持ちもわからうともしたがなとお子には理解できなかった。なお子は混乱した気持ちのままずっと泣き続けた。そしてなお子はまた今までのすさんだ生活に戻っていく。

佐伯専務は数週間あまり田中社長の仕事ぶりが気になつて、ふつうに見れば精力的に仕事をこなしているように見えるが、佐伯の眼には田中は尋常ではない。一心不乱に何かを思い切ろうとして仕事に打ち込もうとして、田中が子供の頃からの長いつきあいなのだ。田中のことは自分と同じく、佐伯の仕事は勤まらない。

「そんなある日、佐伯に田中社長から声がかかつた。」

「断る理由はない。また二人でゆつくり飲みませんか」  
「たのらうか。それが佐伯には気になつた。ひよつとしたら社長からじかに、最近の社長の変わった様子の理由を聞き出せるかもしれない。」  
「場所はどちらにしましょうか。またN Eに行きますか」

「いや。あそこはやめましょう。ホテルのバーがいい」  
何を気にしているのか。NEで何かあったのだろうか。  
市内にある高級な方のホテルのバーはこの町の割には値段は高い  
がそれなりのものも出さずし雰囲気も悪くない。しかし田中はそうい  
う場所は好みではなかったはずだ。  
珍しく仕事を定時に繰り上げ、軽い食事をしたあと佐伯は田中と  
一緒にホテルに向かった。  
いつもの習慣で、二人はまたカウターのすみに並んで腰掛けて  
いる。田中はいつもの好みのカクテルを飲んでいる。佐伯は安いバ  
ーボンのソーダ割りを口にしてる。  
しばらくのあいだ、二人とも口をきかなかった。佐伯から言い出  
せる雰囲気ではない。  
ようやく田中がため息をつくように話し出した。  
「佐伯さんと知り合ってから何年になりますか」  
「社長が中学生の頃です。もう何十年にもなりますか」  
「そんなになるんですねえ」  
「またしばらく二人とも黙っている。」  
「覚えていますか。私が東京の大学に進みたいって父親に言ったと  
きのことを」  
「よく覚えてますよ。先代は猛反対しました。家を継ぐのにわざわざ

「そんな回り道をする必要はないっておっしゃってました」

「そうだ。家を継ぐことは約束していたのに、父は私の頼みをきいてくれなかった」

「古くからこの世界で修羅場を何度もくぐり抜けてきた方ですから、社長のおっしゃるような、大学を出て家を継ぐというような考え方がおわかりにならなかったんですね。無理もない」

「あのとき私の味方になってくれたのは母親と、佐伯さんだけだった。組と家族のことは別だ、幹部とはいえ家族のことには口は出させないって父は怒ったのに、佐伯さんだけが破門覚悟で父を説得してくれた」

「今考えれば、ずいぶんむちやをしました」

「そのおかげで私は自分のわがままを通すことができた。佐伯さんにはまだまだ恩返しをしなくちゃいけないな」

佐伯はじつと田中の横顔を見ている。

「考えてみたんですよ。あのとき佐伯さんが味方になってくれたのか、自分だけで父を説得できるはずはなかった。母はいつも結局は父の言うことに従う人だった。佐伯さんだけが、若いときの修行だと思っただけで、息子を出すと思えば悪いことじゃないと、あの頑固な父を説得してくれた。」

あのとき東京の大学に行っていたことが、回り回って組が今のよ  
うな会社になって生き延びていることと関係はあるのかもしれない。  
でもそれが本当にいいことだったんでしょか。私は自分がし  
ばらく自分の現実から逃げたかっただけなんじゃないかって、そん  
な気がするんです」

おかしい。たとえ相手が佐伯でも田中はこんなことを口に出すよ  
うな人間ではないはずだ。他人に弱気を見せるような人間ではなか  
ったはずなのだが、いったい何があったのだろうか。

「この人生ではない別の人生、ここではないどこか別の場所。人は  
誰でも時々そういうことを考えがちなものですよ。でも自分の人生  
から逃げ出すことはできないし、自分をやめるわけにはいかない。  
みんななそうやって生きていますよ」

「そうだった。佐伯さんはいつもそうやって自分の道を切り開いて  
きた。今思えば、原田は別の場所、別の自分を捜そうとして、結局  
は破滅していったんだな」

今度は死んだ人間の話をしている。田中はどうしてしまったのか。  
「お疲れのようですね。早めに切り上げませんか」

「そうしましょうか。何だかこのままだと愚痴ばかりになってしま  
いそうだし」

「それじゃ車を呼びます」

「いや、勝手だけどしばらく表を歩きたいんです」  
「わかりました。ちよつと電話をかけてきてよろしいですか」

田中がようやく微笑んだ。

「愛妻電話ですか」

佐伯は苦笑いを浮かべてラウンジに出て電話をかける。しかし相手は妻ではない。

「私だ。社長と一緒にホテルにいる。そうだ。これから二人で外に出るから、気がつかれないようにゆっくりと距離をあけてついてきてくれ」

ただの思い過ごしであればいいが。佐伯には田中がなんだかこのままとりためもなく崩れて、何をするかわからないやな予感がしていた。保険は打っておいた方がいい。

ホテルを出て田中はゆっくりと裏町の方に歩いていく。佐伯は少しだけ後ろから田中に黙ってついていった。

町は静かだった。

しかし路地を横目に通り過ぎようとしたとき、路地の奥で人の声がした。佐伯が何だろうと思つたとたん、田中が突然路地の奥に駆け込んでいった。佐伯はあわてて田中の後を追つて走つていた。路地の奥では何人かの男女が輪を作つて何かを見物している。け

んかのようだ。取っ組み合っているのは男ではない。時々見物人の  
中からはやし立てるような声があがる。  
田中は見物人の輪を力づくで突破して中に飛び込んだ。彼らは一  
瞬何がおこったのかとまどったが、すぐに田中につきかみかろう  
とした。それを後から追ってきた佐伯が一瞬にして蹴散らす。暴力  
沙汰は久しぶりだし第一管理職のやる仕事ではないのだが。  
けんかをしていたのは、なお子と、そしておそらくは仲間の女の  
ひとりだ。田中は二人を無理やり引き離して一方の女の頬を平手で  
思い切り叩いた。女はあっけなくすっ飛んで腰を抜かした。田中は  
なおも容赦なくなお子を片手で押さえ込んで、もう一方の手でなお  
子の頬を今度はさらに強い力で叩いた。乾いた大きな音がした。  
「何すんだよ馬鹿野郎！」  
「なお子は大声で叫んで田中につきかみかろうとする。しかし田中  
がもう一度平手打ちをしようとして身構えると、なお子は思わず首を引  
っ込めた。」  
仲間のけんかを、突然中年の二人組にじゃまされたちんぴらた  
ちは、訳が分からないという様子からすぐに、自分たちの楽しみに  
邪魔が入ったことに怒り始めていた。  
「なんだよてめえは。俺たちのタイマンのじゃましやがって」  
「たしかなお子の恋人と称する若い男が田中になぐりかかろうとし

た。  
しかし田中は振り向くと同時に、男のみぞおちに思い切り平手を叩き込んだ。男は一瞬呼吸できなくなり、腹を抱えてその場にしゃがみ込んだ。  
「何がタイマンだ。恋人づらなんかしやがって、おまえのやっぺい。何は女にけんかをさせてそれを見物して楽しんでるだけじゃないか。笑わせるな！」  
田中の気迫に気おされながらも、一人の男が特殊警棒を振り出して殴りかかろうとした。  
佐伯はその振りかざした腕をとってそれを軸にして男をアスファルトの道路に叩きつけた。動かなくなった。多分しばらく入院が必要なけがをしているだろう。  
「手を出すんじゃない！後ろを見ろ」  
佐伯のいったことをきいて振り返ると、路地の両端に男が一人ずつ立っている。冷たい無表情の、しかし暴力的な雰囲気を感じさせない、明らかにプロだ。  
「私たちとその女に何かがあったら、そこにいる二人がおまえたちを始末することになるぞ。二人とも素手で何人もばらしたことがある。試そうなんて思うなよ」  
「佐伯さん」

田中は初めて自分が何をしているのかに気がついた様子だった。なぜこんなことをしているのかも自分でまだわかっていない。

「佐伯さん、頼みがある」

「はい」

「彼女をどこかに連れて行って、手当をしてやってくれ。それからこいつらを適当に追っ払って、彼女に近づかないようにしてくれ」

「わかりました」  
「なんだよ。てめえなんかに関係ねえだろ！」

なお子が叫ぶ。

「黙れ！俺をただの女に甘い中年なんかだと思ふなよ。彼のあとについて行くんだ」

二人の男が路地の両側から次第に距離を詰める。

佐伯に引きずられるようにして、なお子はその場からいなくなつた。

残された田中は、興奮と恐怖で判断力のなくなつた男女に取り囲まれて、いることに気がついた。

「治療費が必要だな。これだけあれば足りるだろう」

田中は札入れからカードを抜いて無造作に地面に投げ捨てた。

ちんぴらたちはそれを急いで拾って、けがをした仲間を抱えてあわててその場を立ち去つた。

田中は一人路地の中央に立って、いったい自分は何をしたのかと考えている。自分の娘でもない、恋人でもない、赤の他人の小娘のすることだ。どうしてそんなに気になったのか。おまけに佐伯さんまで巻き込んでしまった。佐伯さんは何かに気がついていたのか。当分合わせる顔がないな。

田中は二人の『ボディガード』がまだ自分を見守っていることに気がついて、眼で合図をした。二人は黙礼をしてどこかに消えていった。

田中は深いため息をついた。

路地から出てきた田中の後ろ姿を見るものがいたら、どこかの店で法外な代金をぼられたうらぶれた中年男が、落ち込んでしょんぼりして帰宅するところであるかのように思っただろう。

佐伯はホテルの部屋でなお子の顔の傷の消毒をしている。

「痛っ。もう少ししていいねにしてよ」

「ぜいたくは言うな。昔覚えただけの直し方だ。プロじゃないんだから多少のことは我慢しなさい。私は社長と違って女に幻想は持っていない。だからね、女同士がつかみ合いのけんかをして、別に何とも思わない。ただ、顔は女の人生の商売道具なんだから、顔に傷跡が残るようないかなければ、顔は女の人生の商売道具なんだから、顔に傷跡

「どいつもこいつも人のじゃまばかりしやがって。関係ねえだろ」  
なお子は完全にふてくされている。

「私は社長に言われてやっていただけ。しかし社長の気持ちまでは分からない。いったい何があったんだ。仲が良さそうに私には見えたらんが。言いたくないのなら言わなくてもいい」

なお子が少し言いよどんで、ぼつりと言った。

「あいつ、あたしにひどいこと言ったんだ」

「何だ。つづけなさい」

「ひとがせっかくカレーライス作ったのに、台所には勝手にはいるなだつて。あたし一生懸命作って、あいつだつておいしいうつて言ったのに、台所は奥さんの場所だから勝手に入るなつて言ったんだよ。奥さんが怖いならあたしと遊びでつきあうなつていうのよ」

「なんだかよくわからないが、よくある痴話げんからしいな。もう少しわかるように話してくれないか。手当はもうすんだよ。多分傷あとが残らないがあとでちゃんとした医者に診てもらいなさい」

なお子はまだ興奮が冷めきっていない様子で、順序立てて話すのにはどう言えいいのか考えていたが、やがて重い口を開いた。

「あたしがNEであいつを待っていて酔いつぶれたのを、あいつが自分の家に運んで泊めてくれたの。朝ごはんも食べさせてもらった。おいしかった。そのままじゃもうしわけないから、お礼にカレーラ

イスとサラダを作ったの。今まで料理なんてしたことなかったけど、一生懸命作ったの。

次の日電話で聞いたなら、おいしかったって。今まで食べたことがないくらいおいしかったって言ったんだよ。それなのに台所は奥さんの場所だから勝手にはいってもらっちゃ困るだって。ひどいと思わない？あいつ奥さんが怖いくせにあたしとこっそりつき合ってたんだ。中年なんてみんな同じだよ」

佐伯はなお子の話を黙ってきいていたが、途中から腕を組んで横を向いて考え込んでしまった。

「おかしいな」

「何がおかしいのよ。おかしくなんかはないよ」

「いや、不思議なんだ。社長に奥さんはいないんだ」

「そんな。嘘だ。別居してるんでしょ。遠いところに行っているって言ってたよ」

「遠いところね。確かにそうだ。帰ってこられない場所にいる。社長の奥さんはもう何年も前に亡くなっている。あの家に住んでいるのは、社長一人だけだ」

「亡くなっているって」

「だからなぜ社長がそんなことを言ったのか、私にもわからない」  
佐伯となお子は黙りこくってしまっただ。

やがて佐伯が話し始めた。

「考えてみたんだけどね」

「言ってみてよ」

「社長はやっぱりうれしかったんだと思うよ」

「なんでわかるの」

「私と社長とは長いつきあいなんだ。歳も違うし考え方も違うから、社長の考えていることが何もかもわかるわけじゃない。それでもだいたいの見当はつく。」

「考えてもごらん。親子ほども年の違う若い女の子が、自分だけのために料理を作ってくれたんだ。しかもお礼だと言って、純粹の好意でね。うれしくないわけがない。私だってきつと同じことがあつたらうれしいよ」

「だったらなんであんなこと言ったの」

「説明がむずかしいんだが、あの家の台所は社長にとって、奥さんの思い出しみこんだ場所なんだ。それはわかるね」

「うん」

「その台所で、君は社長のために料理を作った。ちやうど亡くなつた奥さんがいつもそうしていたように」

「そうね」

「社長は奥さんの思い出を大事にしている人なんだ。だから再婚も

しなかつた。それと同じように、きっと社長は今の君の好意を大切に  
にしたかつたんだ。二つの気持ちは別々のものだからね。男にはそ  
んなふうと同時にふたりの人のことを思うことがある。たとえその  
うちのひとりが出なくなつた人でも」

「うん。そういうことつてある」

「台所で料理をしている君の姿を想像したら、どうしても奥さんの  
ことを思い出してしまふ。そういうことは奥さんへの気持ちと今の  
君への気持ちをがちやませにしてしまふことになる。私の言つてい  
ることがわかるかな」

「うん。なんとなくわかるような気がする」

「そういう気持ちは両方に対して失礼だ。少なくとも社長はそう思  
つた。奥さんへの思いも大切にしたいし君の純粋な気持ちも大切に  
したい。だからそれを何とか区別しようとして、言い方を間違えて、  
台所にははいらないでほしかつたなんていう、おかしな言い方にな  
つたんじゃないかな。ややこしい話だが」

「よくわからないうけれど、社長はあたしが好きだから、あんなこと  
を言つたつていうの」

「私の想像にすぎないよ。しかしね、社長が君を好きだつてことく  
らいは、簡単にわかる」

佐伯が少しだけ語気を強めていった。

「君にだってわかるだろう。もしも好きでなかつたら、どうしてあんな危ないところを自分から飛び込んで、力づくでけんかをやめさせようなんてことをする。赤の他人の不良娘のために危険を冒して体を張ったんだぞ。惚れていなかっただらあんなむちやをするはずがないだろ。社長は今まで自分からは一度も暴力を振るわなかつた人だ。そんなひとにこんなことをさせて。私はこうなることをいちばん心配していたんだ」

なお子がべそをかきはじめた。

「あたし、田中さんに、ひどいこと言った」

「これで社長の様子がおかしいわけが分かったよ。社長の最近の仕事ぶりを教えてあげようか。それこそわき目もふらず一心不乱に仕事に打ち込んでいる。見ていて恐いくらいだ。社長は仕事で何かを忘れるように必死になっっているんだ。今まであんな姿は見たことがなかった」

「どうしてなの？」

「私の勘が正しければ、君が今言ったことが原因だ。君を傷つけたことを後悔して社長は自分を責め続けていたんだ。そして何とかして君を忘れようとしているんだ」

「嘘よ」

「嘘じゃない。私の勘はずれたことがないんだ。中年男の純情は  
「怖いよ」

「あたしはどうすればいいの」

「なお子はこれからどうすればいいの不安でおびえている。佐伯  
は今まであったときとはどこか違う雰囲気です。恐ろしく思えた。

佐伯が様子の違う話し方でしゃべりはじめた。

「どこから話そうか。君のこと。山口なお子。二十二歳。西町のア  
パートに住んでいる。無職。両親は隣の町で地道な堅気だ。恋人は  
稲田次郎。どこかから流れてきた来たよそ者だ。最近の若い人は  
ぐに同棲とかをするのかと思っていたら、君は違うらしい。よくわ  
からないな」

「どうしてそんなことまで知っているの」

「最初に会ったときに気になっ全部調査させておいた。この町の  
ことは何でも知っておかなければいけないんだ。特に表から見えな  
い世界のことは。」

「私は現実的な男だから、社長と君がうまくやっついていけるはずはな  
いと思っっている。だから社長のところに戻ってほしいなんて思っ  
ていない。そこで頼みがある」

「何？」

「消えてほしいんだ。あの連中とも縁を切って、どこか遠くの町に

行つて静かに暮らしてもらえないか。そうすれば今度こそ社長もあきらめがつく。そのための金なら何とでも都合がつくよ」

「いやだよ。そんなことしたらあたしひとりぼっちになっちゃうよ」  
「どうしてもか」

「いやだ」  
「それじゃしかたがないな。そんなに言うんならあの次郎という男のところに戻るんだね。その代わり君はもうこの町には住めない。どこかに流れていつて墮ちるところまで墮ちるんだね。君の人生だ。好きなようにしなさい」

「佐伯さん」

「何だい」

「田中さんがあたしのことを思っていてあたしのことを忘れようとして必死だつて本当なの」

「本人に確かめた訳じゃないからはっきり言えないが、それしか理由が思い当たらないだろう」

「それに佐伯さん」

「はい」

「あんなことが出来るなんて、佐伯さんやくざなの」

「この頃は自分でもよくわからない。やくざにもなりきれないし堅気と言うにはやっていることが汚れ仕事ばかりだ。」

午前四時に迎えの車を寄こす。それに乗ってどこにでも好きなところに行きなさい。私はもうこれ以上何も言わない。それじゃ、お休み」

佐伯は部屋を出ていった。

なお子は混乱していた。あんな事を言っておきながら田中は自分のことを忘れられないなんて、理解できないことだ。でも、佐伯の言葉にも説得力があった。なお子はもうどうしたらいいのかわからなくなりかけていた。

涙がこぼれた。

なお子は考える力も失い、迎えの車に乗って自分のアパートに帰っていった。

翌日の昼。

「はい」

「田中さん」

「なお子か。どうしたんだ」

「ごめんなさい。電話かけるつもりなかったの」

「なお子は泣いているようだった。」

「だいじょうぶか」

「次郎が、あたしのことで田中さんと差しで話をつけるって言って

るの」

「君のこと？」

「田中さん、来なくていいよ。もういいよ」

「さて。話をつけるって言うているんだな。どういふことかちゃんと言いなさい」

「今日の夜中の十二時、波止場の第四倉庫の裏で待っているって電話しろっていわれたの。あんな恥をかかされて黙っていられるかって。でも、もういいよ。あたしなんかのことで田中さんにもうこれ以上迷惑かけられないよ」

「いや、行くよ。行かなければ君がどうなるかわからない。それにこれは私自身の問題だ」

「いやだ。このままじゃ殺し合いになっちゃうよ」

「誰も死にはしないよ。まかせなさい」

なお子はまだ泣いているようだったが、田中は電話を切った。

しばらく考えてから田中は佐伯を内線で呼び出した。

「佐伯さん。今、なお子から電話があった」

「はい」

「なお子の恋人が私と差して話をつけたいといっているんだそうだな。なお子の様子がおかしい。なお子と何か話をしたんですか」

「申し訳ありません。社長とあの娘に何かあったかを聞いてしまい

まして」

社長の部屋で佐伯は一部始終を話した。

「そういうことがあったんですか」

「私が社長の個人的なことに口を出すべきでないことはわかっていたんですが、社長のことがあんまり気になってつい差し出がましいことをしてしまいました。言い訳のしようもありません」

「いや、それはいいんです。しかしなお子を追いつめてしまった。あの子はずっぱっているようにいて気持ちは優しい子だ。私にも責任はあるんだ」

「責任の話をおっしゃるんですか。それならどうにもやりようがありません」

「いやそうじゃない。そうじゃないんだ。惚れているんですよ」

「あんな小娘にですか」

「わかってはいたことだが、佐伯はそう言わずにいられなかった。そう、あんな小娘に惚れているんだ。自分でも信じられないんだ」

「それが、差しで話をするとかかという件は私の方で何とかできませんが。例のふたりを一緒に行かせれば何も起こらないでしょう」

「いや、向こうは一對一で話をしようと言っているんだ。ここで私が力づくで事を片づけようとしたら、今まで何のために堅気の振り

をして苦勞してきたのか意味がない。

佐伯さん、今日の十二時、波止場まで車に乗せていってもらえませんか。自分で運転する自信がないんだ」

佐伯と田中が乗った車は夜の国道をゆっくり走っている。お互いに口をきこうとしない。やがて車は波止場に着く。ヘッドライトを消す。

波止場の倉庫の裏に数台の車が止まっただけで、ヘッドライトをつけている。何人がたむろしている様子だ。車の中には見覚えのある赤いスポーツカーもある。

「あそこらしいですね」

「そのようですね」

「それじゃあ佐伯さん、私はここで降ります」

「私も一緒に行きますよ」

「いや、あなたは今なくていい。これは私の個人的な問題だ」

「みずくさいですよ社長。あなたは私にとって大切な人だ。そんな

むちやをさせるわけにはいきません」

「私にしてもあなたは大切な人だ。だからこんなことにまきこむわ

けにはいかない」

「どうしてそんなにこだわるんですか」

田中はしばらく黙り込んだ。

「原田のこと」

「それがどうしました」

「覚えていられませんでした。あいつが何をしたかを」

「忘れるはずがない。あの男は生きて帰れないのを承知でたった一人

で乗り込んできて、社長をはじめいたんだ。あとにも先にもあんな

奴はいない」

「そんなことじゃない。あいつは自分の信念だけで身内でもない赤

の他人を守ろうとして自分の命を投げ出したんだ。堅気のくせに渡

世の義理なんか背負い込みやがって、あいつ。ここで私がほかでも

ない自分のことの始末をつけるのに人の手を借りたんじゃ、私はあ

の原田の親友だったと名乗る資格がなくなつちまう」

「それじゃ私の立場はどうなりますか」

「あなたと原田とは比較できない。原田は親友で、佐伯さんは最高

のパートナーだし恩人だ。比べられませんよ」

恩人か。そう呼ばれることに佐伯はいつも少し悲しいものを感じ

ていた。恩人というのは死んだ人間との友情を超えられないのか。

「わかりました。これは以上口は出しません。ただし気をつけたくだ

さいよ。あいつらはちんぴらだ。組関係のものならまだけじめって

ものがあるが、あいつらにはそんなものもない。なにをしでかすか

「わからない」

「私も覚悟はしてます。だからこんなものを用意してもらったんだ」

田中は上着の上からズボンのベルトにはさんだものを押さえた。「じゃ、私は降ります。ご自宅に戻っていてください。あとで連絡

を入れますから」  
「わかりました」

闇の中を歩きながら田中は考える。

父は組を守り家族を守りそして私を守るために、世間の塵芥を一身にかぶって修羅の道を歩き続ける一生だった。私はそのように育てられたのだから、当然のこととして父が歩いた道を私も歩くことを選んだ。しかしそのような生き方は自分だけでいいとも考えた。そのために私は組織を改革して合法化することを目指した。その仕事をもう少しのところで完成できるといふところまで来て、自分のある意味での愚かさ故に窮地に堕ちて何もかも台無しにするようなことをやっていっている。何というざまだ。これから起こることの結果によつては数十年掛けて苦勞したものがすべて水泡に帰するのだ。そもそもこのような方針を選んだというところが誤りだったのか。確かに組は会社になり世間の会社よりもよほどクリーンな組織になつた。しかしそれは同時に、世間からつまはじきにされ非道を歩くこ

とでしか生きていけない人は、ちを容赦なく切り捨てることではなかつたのか。私の知る限りは、好きでこの道を選ぶ人間など、嫌はつていない。私のやっつきたこと、飾り汚いこと、誰かにも押しつけているはずの、より多くの事だ。けで、ありや目を指した、誰かにも、他ならぬ。世間の、多。私。社。今。何もかも見失いかけて、いる。か。もし、ない。な。ぜ。原。田。の。こ。と。を。思。い。だ。し。た。の。か。あ。い。つ。は。会。社。と。い。う。も。の。の。本。質。を。見。抜。い。た。が。故。に。会。社。を。捨。て。人。生。を。棄。て。た。原。田。に。と。つ。て。は。や。っ。て。い。る。こ。と。が。き。れ。い。で。あ。ろ。う。と。汚。か。ろ。う。と。会。社。と。い。う。も。の。が。人。間。を。お。と。し。め。る。も。の。だ。つ。た。の。か。も。し。れ。な。い。あ。い。つ。が。最。後。に。選。ん。だ。道。は、い。き。ず。り。の。ひ。と。の。恩。に。報。い。る。た。め。に。親。友。の。私。に。銃。を。向。け。る。こ。と。だ。つ。た。原。田。が。放。浪。の。果。て。に。人。生。の。目。標。を。見。失。い。ほ。と。ん。ど。自。暴。自。棄。に。な。つ。て。い。た。時。に、原。田。の。身。上。を。あ。え。て。聞。こ。う。と。も。せ。ず。彼。に。さ。や。か。な。仕。事。と。住。まい。を。与。え。人。生。を。取。り。戻。さ。せ。よ。う。と。し。た。人。物。が。い。た。と。そ。の。人。物。が。組。織。と。組。織。の。抗。争。に。卷。き。込。ま。れ。家。族。の。身。に。ま。で。危。険。が。及。ん。だ。と。き。に、原。田。は。そ。の。一。方。の。組。織。と。取。引。を。し。て、自。分。を。た。だ。の。道。具。と。し。て。好。き。な。よ。う。に。使。う。代。わ。り。に。そ。の。一。家。に。は。手。を。出。さ。な。い。と。約。束。さ。せ。た。彼。ら。の。要。求。は。敵。対。す。る。組。織。の。ト。ッ。プ。つ。ま。り。こ。の。私。を。撃。つ。た。の。

かどうかは今となつてはもうわからぬ。彼が最初から私のところ  
に來ていればあんなにかし相手は私だとわかつた。偶然というにはあ  
まりにも不幸だ。しかし相手が私だとわかつた。偶然というにはあ  
も逃げることなしにかつた。暴力とは無縁でなかつた。想像があるとい  
うことがどんなに行むか。理解できるだけの想像があるとい  
田がそのようになつた。最後の瞬間まであいつの苦惱が伝わつてきた。  
らく悲しなかつた。最後の瞬間まであいつの苦惱が伝わつてきた。  
防弾チョッキなど着ていなければよかつた。しかしあいつの苦惱が  
なり自分に人生の筋を通さうとしたのだ。人生を投げ出した。最後  
貫き通したのだ。あいつは自分の人生を投げ出した。最後  
いたのかも知れない。あいつは自分の人生を投げ出した。最後  
つたのらう。そう考へなければ原田の人生はあまりにも無惨だ。  
原田は原田なり。修羅の道を歩いてきたのだ。もしも原田が今の私  
のようになつたらどうしたか。いや。そんなことを考  
えても意味はない。原田の年齢で完結してゐるのだ。想像し  
ないが原田の人生は年齢で完結してゐるのだ。想像し  
味はない。それに原田の年齢で完結してゐるのだ。想像し  
ようない。それに原田の年齢で完結してゐるのだ。想像し  
友のためには自分から身をひく。原田は自分だ。思つてゐる。友  
人たちは今も

もう誰もいない。ひとり若くして病に倒れ、ひとり私の目の前で無惨に撃ち殺され、そして残された彼女は親友の両方をなくした哀しみのあまり心を閉ざしてしまった。私は彼女に何もしてやれなかつた。私ひとりがおこりに取り残されてこのように生き恥をさらしてきている。私の最良のものは皆、私一人を残してあまりにも早くいなくなつてしまふ。私は自分のためだけに彼らの友情に報いなく、そして今まで見捨ててきた人たちのためには、この場だけはやり通さなければいけない。小娘ひとりのことだからと言つて逃げたり人まかせにしたら私は原田に会わせる顔がない。これが私の最後の仕事だ。

明るい場所まで最後の三步を踏みしめるようにして歩く。

暗闇の中から田中がゆつくり現れる。

ちんぴらたちが身がまえる。

次郎はとっさになお子の腕をつかんだ。

「な小子、大丈夫か。まさかけがはしていかないだろうな」

「てめえ、気安いぞ。かっこつけて一人でのこのこやってみやがつて。よくもなめたまねをしてくれたな」

「それは逆だ。差しで話をつけるって言ったのはおまえだろ。なんでもそんなに連れてきた。話が違ふだろ」

「うるせえ。てめえ、俺の女に手を付けてさんざんおもちゃにしゃがって、ただですむと思ってるのかよ。落とし前をつけてもらおうじゃねえか」

「差して話をするとか、落とし前をつけるとか、本当の意味が分かって言っているのか。それに俺はなお子には手を出してはいない。そこらへんの中年と一緒にするな」

「言い訳するんじゃない。てめえなお子を囲おうとしただろ」

「囲おうとしたんじゃない。てめえなお子を囲おうとしたら、おまえが何をするか心配だったからな」

「同じことじゃねえか」

「いい加減、なお子の腕を放してやれよ。放せていうんだよ！」

次郎がびっくりしてつかんでいたなお子の腕を放した。

なお子は一瞬躊躇したあと意を決したように急いで田中のかげに隠れた。

「なお子、お前」

次郎が然然としている。

田中はなお子が自分を選んだことでようやく最後の決心がついた。

「なお子、さがっている。

彼女の代わりに言ってる。なお子はな、別におまえさんに

あいそが尽きたわけでもない。いい金づるが見つかったから乗り換えようっていうんでもない。彼女は両方に惚れているんだよ。そうだな、なお子」

なお子は恐怖で返事ができない。

「彼女は俺たちを天秤に掛けたわけでもない。どうしても一人に決まなければならなかったからしかたなく決めたんだ。恋人面するんなら少しくらい彼女の気持ちをわかたせてやれよ」

「訳のわからねえことになってんじゃねえ。落とし前をつけてやる」

次郎は後ろのポケットからナイフを取り出した。ほかの男たちもナイフを取り出した。

「そんなことだろうと思った。どうせ自分たちがをるのがおかたろうが、万が一ということもある。これを持ってきておいてよかったですよ」

田中はベルトにはさんだ中型の自動拳銃を取り出した。遊底を引いて初弾を送り込む。

ちんぴらたちが一瞬ひるむ。

「そんなおもちやでびびるとでも思ってるのかよ」

次郎が虚勢を張る。

「おもちやなかな」

田中はいきなり止まっていた自動車のヘッドライトを撃つ。乾い

た大きな発射音とガラスの割れる音がしてヘッドライトが消えた。  
「おもちゃじゃなかった。俺のパートナーはやっぱり信頼できる」  
「きたねえぞ、そんなもの持ってたきやがって」  
「そうかな。俺はこれでようやく五分と五分だと思っただけ」  
田中は一瞬の呼吸のあと、まったくのはったりだけで大きな声を  
出した。  
「俺の後ろに隠れているやつ、前に回って一カ所に集まれ。おまえ  
らから最初に撃つぞ！」  
物陰に隠れていた二人の若い男があわてて田中の前に姿を現し  
た。  
「道具をしまえよ。おまえたちを殺すつもりはないよ。自分の身を  
守るために持っていただけだ。俺は暴力ぎたは苦手なんだ」  
田中は拳銃の安全装置を掛けてベルトに戻す。  
ちんぴらたちもおおずおおずとナイフをしまった。  
「わかったよ。なお子はくれてやらあ。そのかわり慰謝料を出せ」  
「慰謝料だと。おまえに慰謝料を受け取る資格があるのかな」  
「一千万、いや五百万でかんべんしてやらあ」  
「いやだね。おまえは自分の女を金で売ろうっていうのか。ちんぴ  
らどころかポン引きだな。俺はなお子を金で買うつもりはないよ。  
一円だって払わない」

「じゃあどうするってんだ」

田中は少しの間考えた。

「そうだな。そうだ。俺の顔を一発殴れ。それで全部済みってことにしないか」

「笑わせるんじゃないよ。そんなことで済むかよ」

「それが気に入らないっていうんなら、おまえをはじくしかないな」

次郎が一瞬ひるんだ。

「どうしてそんな馬鹿な話になるんだよ」

「差して話をするといっただけはお前だろ。一対一で話がつかなかつ

たらあと殺し合いになるだけだ。差して話をするなんて口に出し

たお前が悪いんだよ」

「そんなもの持っているからってお前ひとりで俺たちを相手にでき

るんでも思っているのかよ」

次郎は虚勢を張る。

「わからない。ただし言っておくがこのチャカにはまだあと十二発

残っているんだそうだ。おれはこういうものがあんまり得意じゃな

いんだが、これだけあればおまえ一人ぐらいはやれるだろう。それ

にうまくいったら残りの連中も始末して俺が懲役を食らうのが、な

お子にはいちばんいいのかもしれない」

「馬鹿なまねやめてよ！」なお子が必死に叫んだ。「誰も死なない

って約束したのに！」

田中には撃つ気はなかった。一人ならともかく複数の動いている標的に弾を当てる腕はない。田中は銃が苦手なだけでなく心底嫌っていた。ちんぴらだからといって彼らが殺されなければならぬ理由はない。

田中はこの場の決着をつけるために気力をふりしぼって言った。「落とし前をつけるんだろ。だから俺の顔を一発殴れよ。俺の方は手出しはしない」

「いいよ。わかったよ。俺の負けだよ」

「逃げるんじゃない。落とし前をつけるっていったのはおまえだろ。俺だって自分なりにけじめをつけたいんだ。殴れよ。そうしないとこれからのおまえらの人生、一生後悔して暮らすようにしてやるぞ」

「もう勘弁しろよ」  
「お前、そこまでふぬけだったのか。瀬戸総業の田中が親にも殴られたことのないこの顔を条件なしで殴らせてやろうって言っているんだ。それができねえっていうんなら、はじくぞ！」

田中の怒気を帯びた声に全員が緊張する。

次郎がふるえながらそれでも田中に近づいてきた。  
「一発殴ればいいんだな」  
「そうだ」

「ほかに条件なしだな」

「そうだよ」

田中は覚悟を決めて歯を食いしばり、腰に差ししてある拳銃を上着の上から左手で押さえた。

次郎は拳を握りしめて、思い切ったように田中の顔を殴りつけた。

田中は二メートルほど吹っ飛んで、地面に転がった。

「いてえ。なお子が惚れるだけのことはあるな。腕っぷしだけはたいたしたもんだ」

なお子があわてて田中のそばに駆け寄った。

「これでちやらだな、おっさん」

「ああ、俺も気が済んだ。お前たち、今日の昼までにこの町をでていけ」

「条件なしじゃなかったのかよ」

「ここから先は別の話だ。二度と俺となお子の前に顔を出すな。ここは俺の町だ。ちらつとでも見かけたら、俺の兵隊がたまえぐるぞ」

ちんぴらたちがあわてて車に乗って走り去っていく。

あたりは暗闇になった。

なお子はふるえながら田中にしがみついている。

「いいパンチだ。あんなこと言わなければよかったかな」

「馬鹿だよ。おじさん本当に馬鹿だよ」

「起こしてくれ。まだふらふらする」

「な。お子が声もなく泣き出した。どうした。私がやくざだとわかって、怖くなったか」

「な。お子は激しく首を横に振る。どうしようか。タクシーひろえるかな」

「その時離れたところで自動車のヘッドライトが点灯して、二人を照らし出した。」

「コート姿の男が降りて近づいてきた。田中さん、もめ事はかたづきましたか」

「驚いたな。警部さん、最初から全部見ていたんでしよう」

「佐伯さんから電話がありましたね。心配だから見に行ってくれ。でもその必要はなかったようだ」

「佐伯さんも水くさいな。警部さん、どうします。私は銃刀法違反の現行犯だ。捕まえればいい手柄になりますよ」

「とんでもない。あなたはやっかい払いをしてくれたんだ。それに若い女を一人更正させてくれた。感謝状を出したいくらいですよ」

「おかしな話だ。昔だったら私がぼろを出すのを手ぐすね引いて待っていたのに」

「上の方からとも言われています。あなたのすること間違いはないから、よほどのことがない限り見逃せ。だから今夜私はここにいな

かった。何も見なかった。ここは俺の町だというのも聞かなかったことにします」

「おおきな借りができましたね」

「貸しだとは思っていませんよ。ああ、それは私が預かって処分しておきましょう。何も知らない若い警官が職務質問でもしたら大変だ」

警部が差し出した手に田中は拳銃を黙って渡した。警部がそれをコートのポケットに納めた。

「お送りしましょうか」

「そこまでは頼めませんよ」

「それじゃお気をつけて」

車は走り去りあたりはまた暗闇になった。

「なお子、君が運転できるかな。私はまだ頭がふらふらする」

「うん」

二人はスポーツカーに乗り込む。

「また助手席だ。本当に怖いよ。女に運転させて事故を起こして助手席で死ぬなんていちばんかっこわるい死に方だ。もう少しスピード落としてくれないか」

なお子は大粒の涙を流しながらアクセルを踏み続けている。

「運転するか泣くか、どちらかにしてくれないか。それじゃ前が見えないだろ」

なお子は急ブレーキを踏んで車を路肩に寄せて、それから田中にすがりついて号泣し始めた。田中は黙って抱いてやっているしかなかった。

なお子が泣きやむのを待って田中は彼女の体を起こした。「運転を代わろう。今夜は私のマンションに行こう」

なお子は黙ってうなずく。席を替わって田中が運転する。失速寸前の安全運転だ。

「新浜に小さい部屋を持っているんだ。時々会社のこと何もかも忘れてぼんやりする時間が必要だね。今まで女はハウスキーパーの人しか入れたことがないんだが」

田中は車をマンションの駐車場に入れて、なお子を自分の部屋に案内する。

「小さい部屋だけだね、居心地はいいよ。シャワーなら今日は下の階の人はたぶん留守だから使っていていいと思う」

なお子は黙ってバスルームに入って行った。そのあいだに田中は電話をかける。

「佐伯さん、終わりました。彼女は無事です。みずくさいじゃないですか。警察に電話するなんて。怒ってはいませんか。明日

は出社は遅くなると思います。それじゃお疲れさま」

「シャワーの音が聞こえてくる。田中はソファにすわって久しぶりのたばこを吸っている。」

「シャワーの音がやんで振り返ると、なお子が田中のバスローブを着て立っている。サイズが大きすぎる。田中はなお子が考えていたよりも小柄だったので少し驚いた。」

「なお子は田中の隣にすわって、田中の顔をじつと見ている。」

「どうした。疲れたか」

「ううん。聞きたいことがあるの」

「言ってごらん」

「田中さん、ほんもののやくざなの？」

「微妙な質問だな。そうだともいえるし、そうではないともいえる。少なくとも昔はそうだった」

「どういうこと？」

「瀬戸総業は昔は会社ではなくて組だったんだ」

「組って何？」

「君の言うやくざのことだよ。昔はこのあたりでは有名だったんだ。私の父が組長だった」

「じゃあ、田中さんは二代目の組長？」

「一応そうなったんだが、その件では父親といろいろもめた。これ

からの時代、こんな稼業は長続きしない、まっとうな商売に変わら  
ないと先は見えてるってね」

「そうなの」

「それで組は私の代で解散した。表向きはね。私は今の会社を金で  
買ってそこからあがりて親の代からの人の面倒を見ようとした。  
でもそんなに楽じゃなかったよ。初めの頃は怖がられて相手にして  
くれなかったり、反対に商売は素人だと足元を見られてだまされた  
こともある。裏切られたこともあるし、不動産も手放したし、私の  
やり方についていけないという人が何人も去っていった。時々、あ  
のまま昔の稼業を続けて、そのままいなくたってしまった方がどれ  
ほど楽だったかと思つたこともある。佐伯さんがどんなひとかはも  
うわかるね」

「専務さん、不思議な人ね」

「佐伯さんは親の代からの人なんだ。あの人が瀬戸総業の裏にある  
組をたばねていた。瀬戸総業はもうほとんどまっとうな会社だが、  
親の代に縁のあった人の面倒はまだ佐伯さんが見てくれているん  
だ」

「それで田中さんは、堅気だけれど、あんなことができるのね」

「田中のかすかに笑つた。  
「今日みたいなのは今までしたことがないよ。それともやっぱり

あの父親の息子ということなのかな」  
「な。お子は田中の方にしなだれかかってくる。」

「ご家族のことを教えて」

「いいよ。家内とは幼なじみだ。私が六年間も東京の大学に行って好き放題のことをしていたの。私もそのつもりで帰ったからこの町に帰ってきてすぐに結婚した。その翌年、子供が産まれた」

「男の子？女の子？」

「女の子だった。あんな小さな生き物が自分の命を引き継いで生きていくっていうこと。あんな小さな生き物が自分のかわいいものがほかにない。両親が初孫をかわいがって、親のいうことに逆らってばかりいた私にできたたったひとつの親孝行だった」

「その子は今どうしているの」

「幼稚園にはいる前に死んだよ。朝になっても目を覚まさなくて、呼吸が止まっていた。死因はとうとうわからなかった」

「かわいそうね」

「生きていれば君と大して変わらない歳だった。家内の悲しみは深かった。私は、子供ならまた作ればいいじゃないか、死んだが、女親で大切にかわいがってやればいいじゃないか、死んだが、女親

というものはそういうものではないらしい。どの子も一人一人がか  
けがえのない存在なんだな」

「そうよ」

「その数年後、今度は男の子が産まれた。私はその子に死んだ友人  
の名前を付けた」

「奥さん喜んだでしょうね」

「ああそうだった。しかし家内はその子の顔を一度しか見ることが  
できなかつた」

「その時亡くなつたの？」

「息子を産んで一週間後だった。妻は身寄りがなくて私の両親もす  
でに亡くて私一人ではどうすることもできなかつたから、私はしか  
たなく赤ん坊を佐伯さんの家に預けた。佐伯さん一家は息子を甘や  
かすでもなく、自分のお子さんとわけなく育ててくれた。お  
かげで息子はいい子に育つた。明るくて優しく、素直なんだが少  
し頑固で、私のことを父親としてだけでなく一人の男として理解し  
てくれていた」

「よかつたわ」

「不思議なことに息子は最近同じ名前の昔の親友にだんだん似てき  
た。そういうこともあるんだな。いつかその親友のことも話してあ  
げるよ」

「息子さんはあの家に住んでいないのね。どうしているの？」

「姫路にある全寮制の学校に預けてある」

「どうして一緒にいてあげないの？」

「私が家族というものについて不器用だからかもしれない。お互いの気持ちは分かっているから、そばにいたりとかえって照れてしまっている。息子の方から離れて暮らした方が私の気持ちがよくわかるからって提案してくれた。担任の教師によると息子には芸術の才能があるんだそうだ。本人も将来そちらの方に進みたいらしい。私の夢は今の会社を完全にまっとうなものにして息子に継がせることだ。伯さんだが、本人がやりたいことがあるならそれはそれでいい。佐子に譲っていい。佐伯さんは大恩人だから。あの会社は佐伯さん親ら会社を切り回していくのはかえって重荷なのかもしれないがあのふたりならきつと私よりもうまくやってくれる」

「欲がないのね」

「もう十分いろいなことを経験したよ。これ以上何も望まない。君のことは別だよ」

「一瞬なお子がためらった。」

「あなたを愛人になれればいいの？」  
「馬鹿なことを言っちゃいけない。結婚したいんだ。それともこん

なおおじさんじゃいやか」

なおお子はうつむいて、かすかに首を横に振った。

「ううん。そんなことないよ」

「そうか。それで安心した」

「ひとつ聞いていい？」

「何だい」

「あたしは奥さんの代わりなの？」

「違うよ」

「それとも娘さんの代わり？」

「どちらでもないよ。君は君だ。それ以外に何も求めてはいない。

結婚したからといって、君に母親の役を押しつけるつもりはない。

し、私の妻だからあれをしることをするなんてはもう言わない。

い。今の君のままでもいい。もっと君のことを聞かせてくれないか」

なおお子は少しためらう様子だったが、ゆつくりと話し始めた。

「中学校の頃からぐれ始めたの。高校には入ったことに親が勝手に

出したんだけれど、一度も行ったことなかった。十六の時に家を飛び

出たの。あとはよくある話。いちどおろしたことがある。でも、

誰とでも寝るような女じゃなかったよ。好きになつたのはいつも一

人だけだった。きらいになつた？」

「そんなことはない。人にはいろいろ生き方がある。どんな人生

「だろ」とそれなりにかけがえないものだ」

「またあたしにわからないことをいつている」

「ああごめんよ。年をとると言い方が回りくどくなってしまうらしい。気をつけるよ」

「そんなことしなくていい。あたしにあわせようとして無理しないでいいよ」

「無理をするつもりはない。これから時間がかかってもいつかお互いに分かり合えるようになるよ」

田中はなお子の肩をそつと抱き寄せた。

「君の人生は始まったばかりだ」

「うん」なお子が微笑んだ。  
マンションの小さい部屋の窓の明かりが消える。

佐伯は受話器を元に戻してから、深いため息をついた。そして寝るのをあきらめて居間の深いソファに座り、読みかけの小説の続きを読み始めた。夜明けまで何時間あるだろう。



